

井寺古墳

Itera Kofun

○調査

橋口利士 越知憲和 竹見基平

○編集

橋口利士

嘉島町教育委員会

2021

序

本報告書は、平成 28 年熊本地震で大きく被害を受けた、国史跡井寺古墳の史跡範囲確認調査成果をまとめたものになります。

発見の経緯となった墳丘周辺の土取や耕作の結果、墳丘は大きく形を変え現在に至っています。地震で被害を受けた部分の復旧と併せて失われた墳丘の整備についても一体的に行うこととし、これまで不明とされていた墳丘の規模及び範囲を確定させることを目的として平成 28 年度から令和元年度まで調査を実施したものです。

調査の結果、墳丘が造られた地面よりも 2m 以上下がっているなど周囲の削平が想定以上に及んでおり、昭和 57 年に実施された調査箇所と併せて 17 の調査坑のほとんどで墳丘に係る地層を確認することが出来ませんでした。ただし、いくつかの調査坑において墳丘構築土を確認することができ、それによりおおよその墳丘規模を推定することが出来ました。

その一方で石室の復旧については安全面の関係から思うように手を付けることが出来ず難航しておりますが、一日も早い復旧を目指し、今後も事業を進めていきます。

最後に、調査を実施するにあたり多くの方からご尽力・ご指導いたきましたことに厚く御礼を申し上げます。

2021 年 3 月

嘉島町教育委員会 教育長 高野 隆

例　　言

- 1 本書は、嘉島町が平成28年度～令和元年度にかけて実施した熊本県上益城郡嘉島町井寺所在の井寺古墳の範囲確認調査報告書である。
- 2 本遺跡の調査は、嘉島町教育委員会が主体となり、社会教育課が調査を担当した。
- 3 資料の整理は嘉島町文化財センターで実施した。出土資料及び記録は、同センター及び上島倉庫に保管されている。
- 4 土層断面図作成は橋口剛士、越知睦和、塩見恭平、村上千佳が分担して行った。
- 5 遺物実測及び作成図面の添書は岩下恵美子、緒方聰美、田中祐子、山田由美、平川恵里子、前田和子、土田みどり、結城あけみが行った。
- 6 本書の執筆・編集は、橋口剛士が担当した。
- 7 土器胎土の色調を示す際には農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版 標準土色帖』を使用した。

調査の実施にあたり、以下の方にご指導・ご協力をいただいた（順不同、敬称略）

山崎秀保 小林万里子 川島美奈子 平山直子 福宜田佳男 近江俊秀 川畠純 後藤昌也
山下信一郎 建石徹 森井順之 宇田川滋正 養場厚 森先一貴 芝康次郎 青木政俊
金田明大 廣瀬覚 中村一郎 小田裕樹 脇谷草一郎 山口歐志 橋本達也 和田晴吾
坂井秀弥 阪口英毅 杉村彰一 梶谷亮治 橋本博文 宮本一夫 甲元眞之 山尾敏孝
高妻洋成 朽津信明 清村幸成 杉井健 下村智 大石岳史 岩井明彦 早田勉 三村衛
野口淳 近藤英夫 大平秀一 Mg.Marcos Labrada Byron Camino 柳本照男 渡辺伸行
西平孝史 宇佐晋一 高谷和生 宮尾千加子 中村誠希 村崎孝弘 長谷部善一 宮崎敬士
坂口圭太郎 廣田静学 亀田学 池田朋生 木村龍生 木庭真由子 豊永結花里 吾田哲也
井鍋誉之 斎部麻矢 秦憲二 加藤裕一 織貫俊一 赤星雄一 岩谷史記 稲津暢洋
亀島慎吾 須貝慎吾 関根章義 山本晃平 石松直 石松智子 高木恭二 森本星史
池田毅 中谷正 原田昭一 今村結記 大津山恭子 神川めぐみ 竹田宏司 杉原敏之
永見秀徳 西嶋剛広 久保信洋 下高大輔 瀬谷今日子 鈴木一有 和田達也 萩野谷正宏
佐々木宏治 中川好広 富樫孝志 阿比留史郎

目 次

第1章 調査の経緯と体制	
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査体制	3
第3節 調査の経過	4
第2章 遺跡の位置と環境	
第1節 遺跡の地理的環境	5
第2節 遺跡周辺の歴史的環境	7
第3章 調査の成果	
第1節 調査の方法	8
第2節 調査地点の概況	10
第3節 出土遺物	24
第4節 井寺古墳発見当時の様子を記した古文書 の発見について	36
第4章 総括	
第1節 井寺古墳墳丘の調査について	38
第2節 墳丘規模の推定	39
第3節 総括	40

調査の経緯と体制

第1節 調査に至る経緯

1 事業の経緯

(1) 井寺古墳と平成28年熊本地震

井寺古墳は、第3章で詳述するが、安政4年閏5月に発見以降約160年間にわたって入口部分が露出した状態にあった。昭和50年代（詳細不明）以降はステンレス製扉により人の出入り自体は制限している状態であったが、入口を密閉する構造になつてはおらず、絶えず外気が直接石室内に入り込む環境にあった。

そうした環境にあって、平成20年度～21年度にかけて実施された熊本県立装飾古墳館による保存環境モニタリング事業や装飾の劣化状況調査により白化の原因が石障の岩石内から塩が析出したものやカビによるものであること、塩の析出とカビの発生は本来対極の環境で発生し得るものであるものが混在している原因として、夏の高温多湿と厳冬期における零下まで下がる極端な温度変化、加えてステンレス製扉の隙間から差し込む日光（特に西日）が石障に当たり、温度がスポット状に上昇することから光が当たるところを中心に塩が析出するということが指摘された（池田2012）。

しかし、こうした原因が指摘されながらも平成28年度に至るまで特に手当て等はされないままの状態が続いていた。

平成28年4月に小職が町の文化財担当の技師を拝命し、こうした問題に対して整備についての検討をしていかなければと思っていた矢先、4月14日の夜に発生した益城町での最大震度7をはじめとする平成28年熊本地震が発生した。

明くる朝、地震が小康状態にあると判断されたため町内の家屋被害調査に割り当てられ、担当の区を回る傍ら、気になっていた井寺古墳の

被害の有無を確認に向かったところ墳丘に亀裂が生じるなどの被害を受けていることが明らかとなった。

その場で県に損傷を受けた旨一報を知らせ、状況を写真に収めた後石室に雨水が流入するのを防ぐため亀裂部分にブルーシートを掛けるよう午後から出勤してきた嘱託職員に指示を出し、その日のうちに墳丘を養生した。

(2) 限定的な史跡範囲の判明、調査実施へ

教育委員会がある町民会館は、救難物資の集積所となつたため絶え間なく届く物資の荷受と仕分けの傍らで文化庁の視察、県文化課との協議を行い、今後の方策について検討していく中で井寺古墳の史跡指定範囲が石室及び直上の墳丘のみと全体の一部に限られることが判明した。

これを受けて石室を含む墳丘全体の復旧を行うために墳丘を含む周辺の土地についての史跡範囲追加指定を行う必要が生じ、補助金を受けながら調査を実施することになった。

(3) 墳丘を含めた周辺の地形測量の実施、町有地部分の追加指定

平成28年度に航空レーザー測量により古墳及びその周辺の地形測量を実施した。これにより既存の範囲指定よりも外側に墳丘の一部と考えられる連続的な斜面の存在があることなどの理由から古墳の一部と考え、既存の指定範囲を拡大し石室の復旧事業と併せて一体的に整備を行っていくこととした。史跡の追加指定については平成29年1月に具申し、同年10月に官報で公示された。

2 昭和57年調査成果

長年の雨によって覆土が流失して希薄化し、石室構造の力学的バランスが損なわれていることから崩壊の危険性を指摘し、保存修理を念頭

※1 古墳の名前は「いでら」となっている。ただし、大字は「いてら」であり。修正予定である。一方で地図以外では「いでら」で通報し、完治（100年が経過）してしまっている感があるので區別したい。

出田勝生・南川知美2012「装飾古墳の博物館化に向けた取組み～装飾古墳保護施設の保存環境について」『岡本基2装飾古墳研究紀要』第9集

に置いた予備調査として昭和 57 年に田添夏喜氏（日本考古学会員）を団長として町教育委員会により実施された。

調査の主眼は墳丘形状把握にあり、墳丘の周辺にはじめ 5 本、追加で 3 本の計 8 本のトレンドを設定し掘削している（第 1 図）。

結果として周溝を確認できなかったことから削平された墳丘の範囲は不明確としながらも、保存すべき範囲として①南と東は現在の道路境界、②北は竹林と畑の境界にある埋没溝、③西は後道前の茶畠と民家との境を挙げている。

遺物は弥生～中世にかけての土器・陶磁器が出土したと報告した（田添 1982）。

現存する墳丘本体については温存する方針であったことが窺われ、それ以外の部分は既に削平されていることや竹林化していて土層の判別が難しいなど厳しい状況であったことが垣間見える。

この後史跡保存・公園化のための墳丘周辺の民有地購入が計画され、平成 4 年に公有地化された。一方で史跡範囲については変更がかかっておらず、平成 28 年に状況が明らかになるまでそのままの状態であった。

3 問題点の整理

調査を実施するにあたって、現状で井寺古墳墳丘が抱えている問題（課題）を整理した。

これらを箇条書きすると以下のとおりとなる。

- ① 墳丘形状
- ② 墳丘規模
- ③ 周溝
- ④ 舟石？

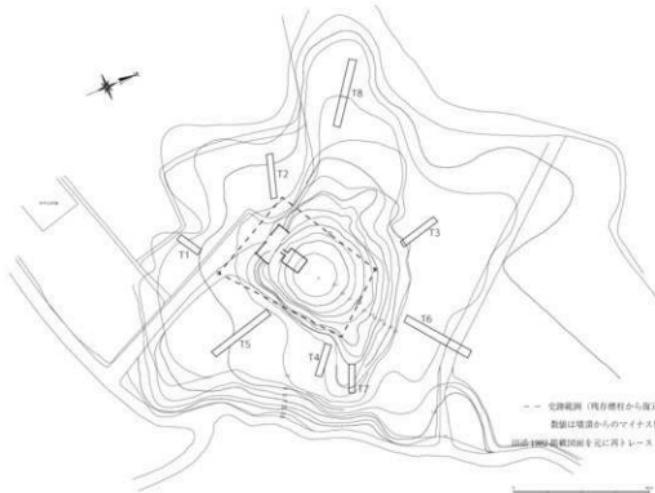
（1）墳丘形状

発見の経緯ともなった土取により墳丘は相当程度削平されている。また、これまでに井寺古墳周辺は畑地として近年まで耕作されてきた。

そのため、大正 10 年の指定時に史跡範囲とされた部分については指定後から現在に至るまで保護され続けたが、その周辺の土地については継続して耕作や削平により変化をし続けていた。

以上のことから墳丘形状は著しく変形を受けしており、旧来の形状が判別できないほどであった。

こうしたことでもあって、残された墳丘から形状を円墳と見る意見、北側の緩斜面形状をして前方後円墳を指摘する意見などが挙がりつつも今日まで決着を見ていない。昭和 57 年の調査



第 1 図 昭和 57 年調査時作成の墳丘周辺地形図及びトレンド配置箇所図

によっても形状を特定するものは確認できていない。

(2) 墳丘規模

形状における問題によって同様に墳丘の規模についても判明していない。石室内の装飾から40mを超える墳丘を想定する意見、現状程度である意見、もっと小さいものと見る意見などあるがいずれも決着を見ていません。

また(1)と同様に昭和57年調査によって墳端を捉えることができない。

(3) 周溝

(1)～(2)での問題同様周辺をほとんど失っているため墳端付近に存在する可能性のある周溝は、地表面の踏査では確認されていません。昭和57年の調査でも確認できていません。周溝を複数箇所で確認できれば、墳丘規模と墳丘形状を推定する大きな根拠となる。

(4) 舟石

墳丘状に転がる石をして舟石の存在を指摘する声もあるが、石材の形状や性状から否定的な見解が強い。もし存在するとすれば周溝同様に形状を推定するための根拠となりうる。

4 事業計画の概要

史跡の範囲確認を行うために、昭和57年に田添氏によって実施された墳丘周間に設定された8ヶ所のトレンチを復旧させ、土層の堆積状況について再度検討を行い、この結果を踏まえて新たな試掘坑を設定し、57年調査では明らかにできなかった周溝の有無、墳丘の形状を検討し、史跡指定範囲の確定を目的とした。

また、新調査坑の設定や成果の検討などについては町史跡保存整備検討委員会に諮り、指導をいただきながら進めていくこととした。

5 法的な手続き

平成28年度時点では石室及びその直上の墳丘以外は史跡範囲ではないため、範囲確認調査を実施するにあたって29年度については井寺古墳を含む一帯の遺跡「井寺遺跡」の発掘届を熊本県教育庁あて届け出た。

平成29年10月に官報で史跡範囲の追加指定がなされた後は、史跡の現状変更届を提出し、許可を受けて調査を実施した。

第2節 調査体制

今回の調査を実施した際の体制は、以下のとおりとなる。なお、地震の復興に合わせて発生する調査業務が急増し、地震以前より抱えている土地区画整理事業の調査もあって調査員に不足が生じたため、平成30～31年度の2カ年にわたって佐賀県から地方自治法（昭和22年法律第67号）第252条の17の規定により各年度職員1名ずつ計2名の派遣を受けた。

【発掘調査】

平成29年度

調査主体	嘉島町教育委員会
調査責任者	高野隆（教育長）
調査事務局	西郡豊孝（社会教育課長）
調査担当	増永貴士（社会教育係長）

平成30年度

調査主体	嘉島町教育委員会
調査責任者	高野隆（教育長）
調査事務局	西郡豊孝（社会教育課長）
調査担当	橋口剛士（社会教育課 技師）
越知睦和（同技師）	※佐賀県教育委員会文化財課から災害支援派遣

平成31（令和元）年度

調査主体	嘉島町教育委員会
調査責任者	高野隆（教育長）
調査事務局	増永貴士（社会教育課長）
調査担当	園田ひろみ（社会教育係長）
橋口剛士（社会教育課 技師）	塩見恭平（同 技師）
	※佐賀県文化スポーツ交流局文化課から災害支援派遣

【整理・報告書作成】

令和2年度

調査主体	嘉島町教育委員会
調査責任者	高野隆（教育長）
調査事務局	増永貴士（社会教育課長）
整理担当	園田ひろみ（社会教育係長）
	橋口剛士

第3節 調査の経過

1 発掘調査の経過

町が地震発生後である平成 28 年度以降今年度に至るまでに実施した調査は下記のとおりである。またこれらに併行して石室内の調査を実施しているが趣旨が異なるため今回は割愛する。また、調査の詳細については第3章で詳述する。

(1) 平成 28 年度

地震後の動きの中で、墳丘周辺の地形情報を得られていないことから航空レーザーを用いた地形測量を実施（第2図）。

(2) 平成 29 年度

旧調査箇所（以後「田添トレンチ」と呼称する。）の特定のため報告書に掲載されている図面を手がかりに表土を探り、1・8 トレンチを除く 6 箇所の場所を特定、調査を実施。すべてのトレンチにおいて削平が著しく墳丘盛土を確認できなかった。

(3) 平成 30 年度

前年度調査できなかった民有地部分（8 トレンチ）及び墳丘に面した道路法面、周溝が想定より大きい可能性を考慮して周辺民有地の調査（9～13 トレンチ）を実施。墳丘周辺において

墳丘盛土を確認できない。さらに墳丘が大きかった可能性を検証するためのトレンチについても作成が著しく Aso-4 火碎流風化堆積物以下の礫層や砂層が認められた。

上記のとおり周溝等を確認できなかつたことから調査方針を切替え、現存墳丘の一部に対して調査区を設定（14、15 トレンチ）して調査。

両トレンチにおいて墳丘盛土の一部を確認。ただしこにおいても削平は一定程度行われていた。また、盛土層下位に水平に堆積する黒色土層を確認。整地面ではないかと推測する。

(4) 平成 31（令和元）年度

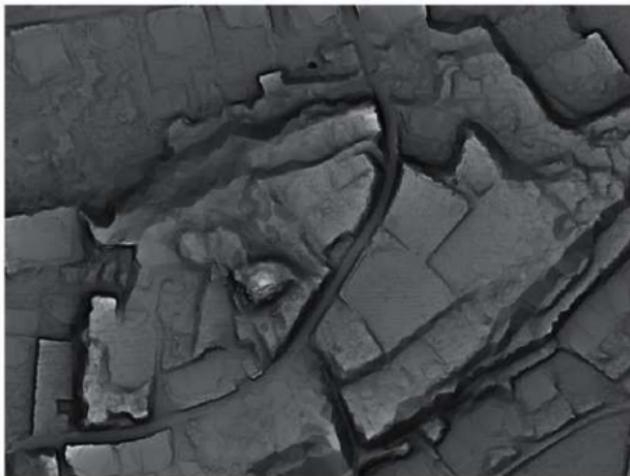
30 年度で把握できた墳丘構築土及びその下層から確認された水平に堆積する黒色土帯の分布範囲を確認するため墳丘北側（14、16 トレンチ）及び東側（17 トレンチ）で調査を実施。

結果 14・16・17 トレンチで墳丘盛土の一部と黒色土帯を確認。前年度の想定どおり黒色土帯はほぼ水平に堆積することがわかった。

2 整理作業の経過

令和 2 年度

図面の確認及び製図作業、昭和 57 年調査分を含めた遺物の接合、実測・製図作業を実施、同年度内に完了した。



第2図 井寺古墳周辺地形測量図

遺跡の位置と環境

第1節 遺跡の地理的環境

1 井寺古墳の位置と環境

井寺古墳は、熊本県上益城郡嘉島町大字井寺字富屋敷に所在する。嘉島町は、熊本市の南部に位置し、加勢川と緑川によって挟まれた東西に長く延びる町である。古墳が存在する井寺集落は、町の東部にあり、付近は浮島熊野坐神社（浮島さん）周辺に代表されるように湧水地が点在する。古墳は井寺丘陵上の最も標高が高い部分に位置する。

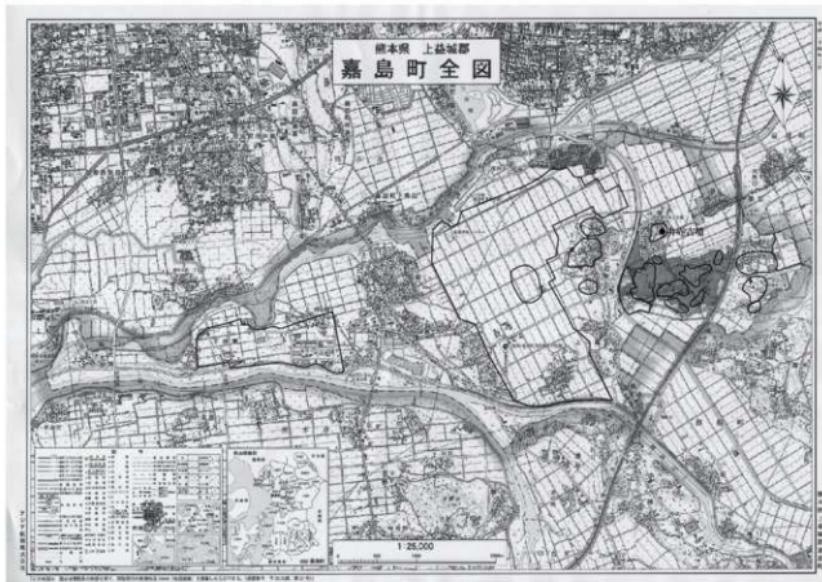
2 古墳周辺の環境

井寺古墳の周辺は比較的現状を留めているよ

うに見受けられるが、それ以外の部分は住宅が密集する集落の中心部分となる。

北甘木台地と井寺の丘陵に挟まれた小地溝帯部分は、布田川断層によって形成されている。都市圈活断層図（池田ほか2001）では井寺古墳のすぐ南側に断層が走っていることが確認されている。北甘木台地との丘陵境界も断層によるものではあるが、昭和5年あたりで実施された土地改良事業により直線的に削平されているなど、元来の痕跡を留めているとは言いがたいものの、およそその地形変化により断層の存在を確認することができる。

今回の地震でも井寺に隣接する益城町櫛島地区の水田に断層の亀裂が生じていることが地震後の衛星写真によって明らかとなっている。



第3図 嘉島町の遺跡地図

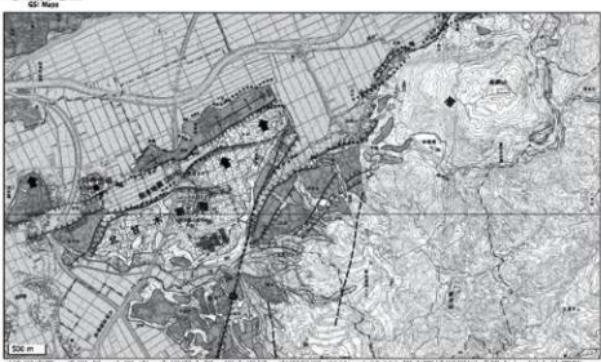
2 古墳と断層

(1) 北甘木断層

從来北甘木台地及び井寺丘陵の間に西走する断層は布田川断層の一部とされ、同断層として呼称されてきたが今回の地震により布田川断層の一部であることは変わりないものの、新たに北甘木断層という名称が付与されている（丸山ほか 2019、第4図）。

また、北甘木断層に発生した地震断層に直行

地理院地図



（池田安隆・千田 祐・中田 高・金田平太郎・田力正好・高沢信司(2001)：1:25,000 都市圈活断層図「熊本」、国土地理院
を一部改変）

第4図 井寺古墳周辺の活断層図

する形で設定されたトレーンチ調査では変位量が小さく連続性に乏しいとされながらも今回の地震に伴う活動が認められている。今回以前の同断層の活動時期について、およそ 16,000 年前以降で 3,000 年前あるいは 10,000 年前とされている（丸山ほか、前掲）。この活動により地震断層の北側において明瞭な低下が認められる。

(2) 井寺集落の地震被害

地震断層が発生した井寺集落に隣接する益城町島田地区では大きな被害があった一方で井寺地区では丘陵上で一部被害が認められるものの全体からすれば比較的の被害が少なかった地域に含まれる。

(3) 断層と井寺古墳

井寺古墳は北甘木断層の北側に隣接しており、地形変化では低下側にある。今回の地震では変位量が小さいとされながらもこの被害であったため、もし古墳築造以後に前回の活動が発生していた場合、筆舌に尽くしがたい被害を被っていた可能性もある。



第5図 町内地震被害分布図

第2節 遺跡周辺の歴史的環境

嘉島町の遺跡

嘉島町の遺跡の特徴として、東側にある北甘木台地とその裾野以外ではほとんどと言っていいほど遺物や遺構が確認されない。

この背景として加勢川・緑川・矢形川といつた河川に周囲を開まれており、つい最近に至るまで洪水の被害を常に受け続ける土地であったことが遠因と思われる。浸水しやすい地帯は水田として利用され、わずかに点在する微高地に集落を形成した。その結果、集落となる部分は繰り返し利用されることとなり、古い時代の集落の痕跡は殆ど残っていない。

遺跡が比較的高密度で残されていると思われる東部地区においても現在の宅地化及び耕作地開発により井寺古墳以外の古墳の殆どは墳丘を失っており、一見すると井寺古墳が単独で存在するように思われる。

しかし、北甘木台地における土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査により多くの墳丘及び石室を失った古墳の周溝が確認された。これにより辛うじて墳丘が残っている上官塚古墳群

（1号墳・2号墳）から南の御前塚古墳に至るまでの丘陵一帯に大小様々な円墳が形成されていたことが明らかとなった（第6図）。

また、これら古墳の分布範囲付近には弥生時代中期の壺棺墓群が確認されており、その数700基前後に及ぶなど熊本県でも有数の量を誇る。

これら調査成果については現在報告書を作成するための整理作業を発掘作業と並行しながら進めているところであり、整理作業を通して新たな成果がもたらされることが期待される。

【参考文献】

- 橋口剛士 2019 「井寺道路」[嘉島町文化財調査報告書] 第4集
橋口剛士 2020 「町頭道路第30区」[嘉島町文化財調査報告書] 第5集
嘉島町教育委員会
吉城史雄 2020 「八代海周辺の墓塚古墳－発生と展開」[熊本県文化財調査報告] 第337集 熊本県教育委員会
杉井健「弥生時代後期集落の消長より見た古墳時代前期有力貴族墓系譜出現の背景：なぜそこに古墳は築かれたのか」[国立歴史民俗博物館研究報告] 211 国立歴史民俗博物館
橋口剛士 2021 「十六塚道路群1901地点」[嘉島町文化財調査報告書] 第7集 嘉島町教育委員会
島津義昭 1992 「二子塚道路」[熊本県文化財調査報告] 第117集 熊本県教育委員会



第6図 北甘木台地における古墳の分布と井寺古墳

調査の成果

第1節 調査の方法

1 調査の方法

(1) 調査区の設定

まず田添トレンチを復元し、それぞれの箇所については当時の調査で付与された番号を用いた。新たに設定したトレンチ箇所については、調査した順に連番で付与している。田添トレンチは1～8、新調査箇所は9～17までとなる。それぞれの場所は第7図のとおりである。

(2) 挖削

田添トレンチは、真砂土と調査区の排土の混合により埋め戻しされていた。周辺の未掘削部分との差が比較的わかりやすくなっている。田添トレンチは1～8、新調査箇所は9～17までとなる。そのため明瞭な境界部分から壁を追って復元した。

(3) 挖削後の処置

田添トレンチは昭和57年の埋め戻しの際に目印となるように四隅にビニール紐を埋設し、位置を特定しやすくしていた。さらに掘削面には真砂土を置き、未掘削面との境界を明らかにするという配慮がなされていた。

今回の調査でもなるべくその配慮に近いものを採用し、四隅にビニール紐を調査区底面から表層にかけて掘削面境界には真砂土を詰めた土のうを底面に敷き、排土と真砂土の混合土によりトレンチの表面付近まで埋め戻した。表土には未掘削部分との境界を明確にするため真砂土を敷きならしている。

2 記録の方法

(1) 断面図等記録作成

記録の方法として、手書きの実測図を作成し、一部のトレンチ断面図についてはSfm/MVSによる3次元計測を実施した。

Sfm/MVSに使用した機種は、撮影をRicoh社製GR II (APS-C、1,690万画素)及びOlympus社製OM-D E-M1 (マイクロフォーサーズ、1,628万画素)を使用し、ポール (Lumica Bi Rod 6G-7500)によるリモート撮影した。処理についてはHP社製Z8 G4及び同Z440、ソフトはAgisoft社製Metashape Professional (Z8)並びに同Standard (Z440)を使用した。

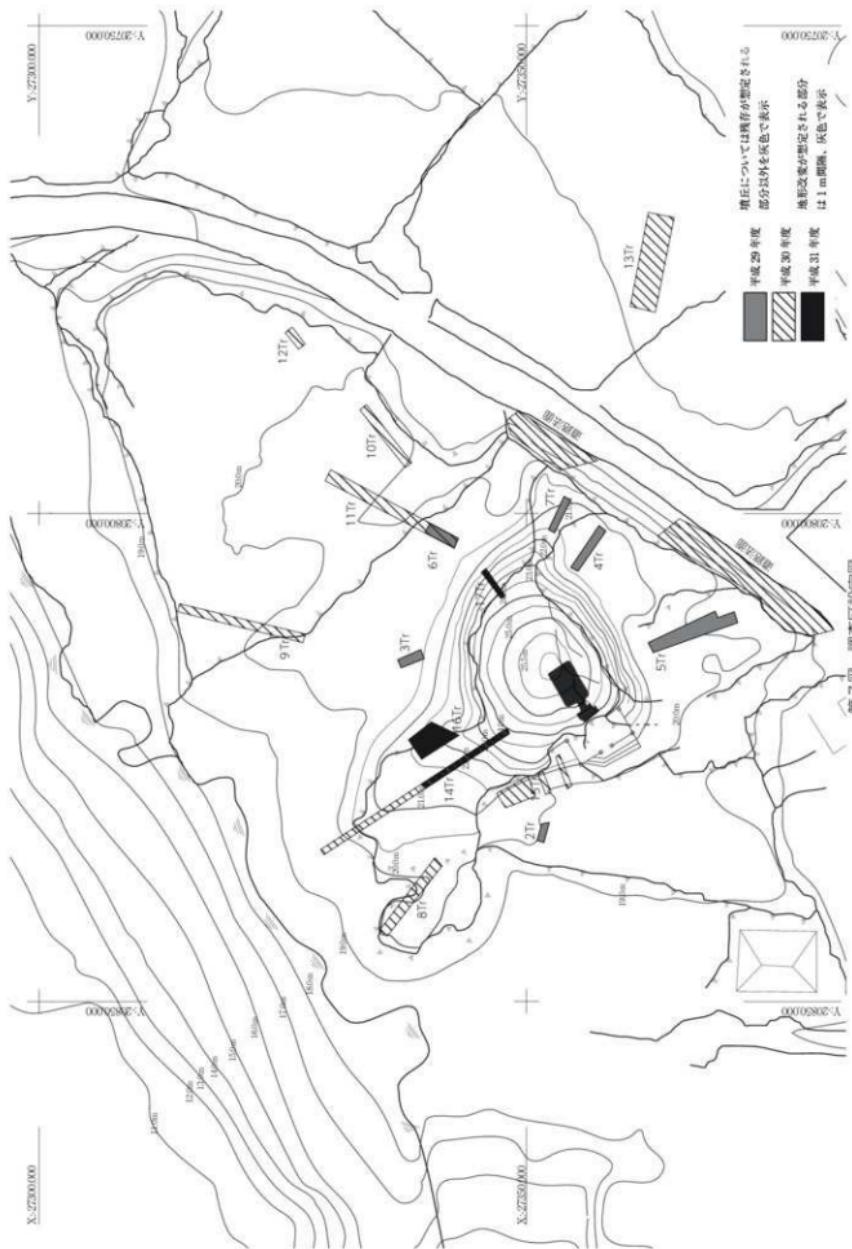
また、墳丘を含めた周辺地形については、航空レーザー測量で得られた点群データのほか、DJI社製Phantom3 Standard及び同社製Inspire2 (レンズ:ZenmuzeX7)を使用し、写真を撮影した。その後処理により作成された三次元モデルからオルソモザイク処理によりGeoTIFFを作成した。QGISに読み込んだ後、平面直角座標(II系)を入れ込んだ図面を印刷し、現場で確認後遺物の取り上げ等を行っている。

また、作成された図面及びオルソ画像からAdobe社Illustrator2020でトレース図を作成した。

(2) 写真

調査員が撮影する記録写真として、デジタルをNikon社製D810 (35mmフルサイズ、3,635万画素)及び6×7判をHasselblad社製503CXを使用して撮影した。また、適宜牛嶋茂氏に依頼し撮影を行った。

第7図 調査区設定図



第2節 調査地点の概況

1 田添トレンチの状況

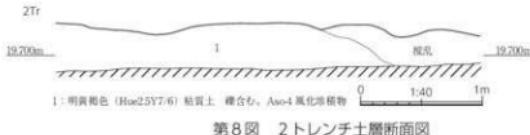
1～8トレンチの概況については以下のとおりである。

(1) 1トレンチ

昭和57年報告書によると1トレンチは墳丘西側の砂利敷き駐車場にあるとなっているが、平成29年度調査時に砂利を剥いでみたところ当時の掘方を確認することが出来なかった。

(2) 2トレンチ(第8図)

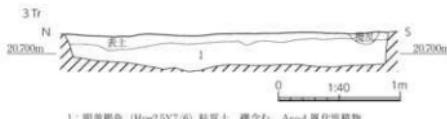
1トレンチと同じく駐車場区画の北側に位置する。砂利を除去した直下でAso-4風化堆積物が露出する。トレンチ東側ではこれを切り込む擾乱層が堆積する。



第8図 2トレンチ土層断面図

(3) 3トレンチ(第9図)

墳丘北側の法面付近にあるトレンチである。表土下すぐにAso-4風化堆積物が露出した。

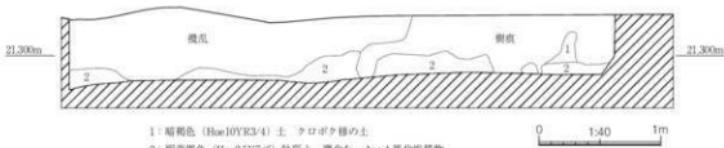


第9図 3トレンチ土層断面図

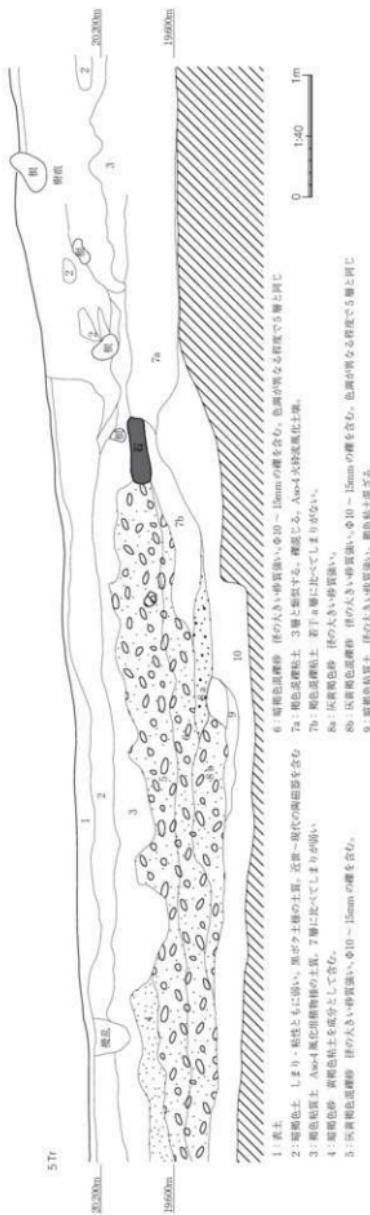
(4) 4トレンチ(第10図)

墳丘南側に位置する。表土下耕作等と樹痕による擾乱層が認められ、その下にAso-4風化堆積物と黒褐色土の混土層が約20cm堆積し、Aso-4風化堆積物が露出する。擾乱層には現代の酒瓶が含まれるなど畑地であった時に形成さ

れたものと推測される。



第10図 4トレンチ土層断面図



第11図 5トレンチ土層断面図

(5) 5トレンチ (第11図)

4トレンチよりも西側、石室中央付近の南北軸に近い位置の延長に設定されたものである。田添トレンチの中でも比較的長距離に設定されている。表土を除去して当初表れた掘り方を元にトレンチ形状を復元しようとしたところ、東壁において攪乱層が一面に露出することとなった。不思議に思いサブトレンチを設けて状況を把握した結果、旧トレンチと方向をほぼ同じしながらもやや位置を違えて掘削されている形跡を見いだした。どちらが先行するものであるかについては確認できなかったが、いずれかが田添トレンチでありもう片方は記録にない調査坑と考えられる。ただし、田添トレンチと考えられる方（西）には他のトレンチで認められたビニール紐がある一方で東側のものにはそれらが認められず、底の近くでビール瓶が出土するなど東側のものについては田添氏が行ったものではないと断定できそうである。

また、これを調査坑とした理由として、目的は不明であるが他の攪乱とは異なり専門知識を有する者が何らかの意図の下で設定され掘削された痕跡であるため調査坑と断定する。ただし、これは記録に残されていないものであり、問題である。

表土下にクロボク様の黒褐色土が堆積する。層中から近世～近代の陶器片やゴミが含まれる。田添トレンチでは褐色粘質土の部分で掘削を止めているが、今回の調査では下層を確認するためトレンチ復元後その層からさらに1m程度掘削をトレンチ西半分において掘削した。

結果としてトレンチの南北で堆積状況がやや異なり、北側では礫を含む褐色粘土（7層）の下に灰黄褐色を呈する砂層（10層）が堆積しているが、南側では7層と類似する土層（3層）と10層までの間に複数の混疊砂層を挟む（5, 6, 8層）。ちょうど7a層と7b層の境界付近に礫が入り込んでいるが、これを境に大きく変化しているように見えるが人為的なものではない。

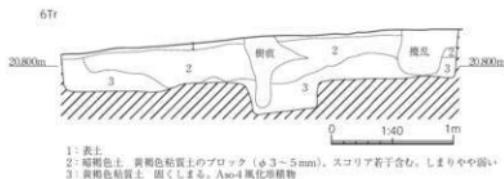
また、北側では樹痕による擾乱が著しく、南側では3層付近で土坑状の落ち込みを認めるものがあったが、古墳の周溝とは考えにくいものであったことから田添氏が報告したように周溝は確認できなかった。

(6) 6トレンチ (第12図)

墳丘東側法面の、隣地境界付近において東西方向に設定されたトレンチである。

表土下に暗褐色土が堆積するが近世の陶磁器片等が出土し、比較的新しい時期に形成された

土である。その下にAso-4火碎流風化土壤と考えられる黄褐色粘土が堆積する。



第12図 6トレンチ土層断面図

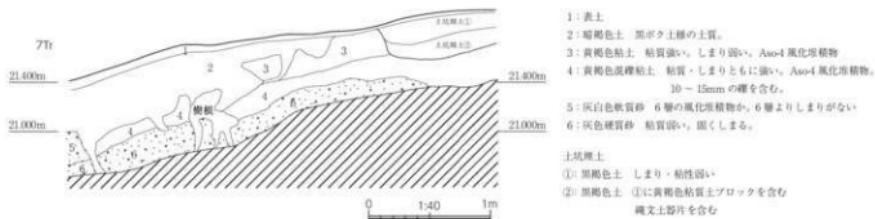
(7) 7トレンチ (第13図)

墳丘南東部にある墳丘から連続する緩斜面に位置し、墳丘構築土が確認される可能性がある箇所である。7, 8トレンチは墳丘周辺の畑などで削平された部分に設定された1~6トレンチとは異なり、墳丘残存が考えられる緩斜面に設定されたものであり、調査方針の変更が伺えるものである。

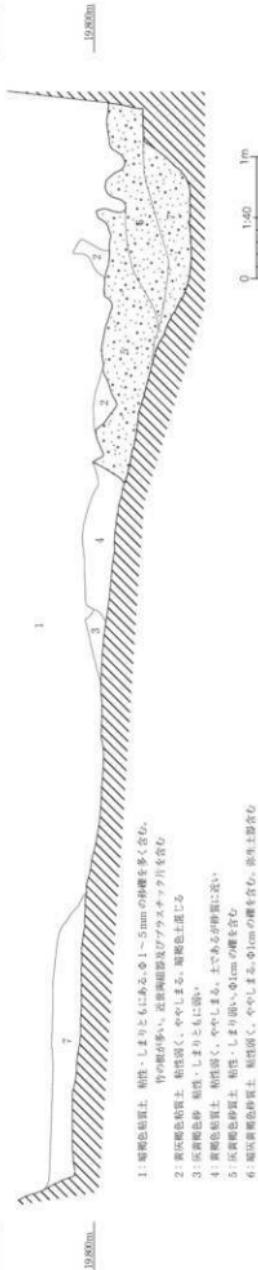
表土下にクロボク様の暗褐色土（2層）が堆積し、その下層にAso-4火碎流風化土壤である黄褐色粘質土層（4層）が堆積する。トレンチ北側では4層の風化土壤のようなもの（3層）が堆積しているが、南側に至るにつれて樹痕等により連続性を失っている。4層下部には固く

しまる砂層が堆積している。

トレンチ北端付近では、4層を底面とし、3層を切り込む土坑が確認された。埋土は黒褐色土で黄褐色粘質土を含むか否かで2層に分かれれる。トレンチ内では昭和57年においてすでに掘削されているため全体の形状は不明であり、遺構内にあった遺物も不明であることから時期についてはわからない。断面から縄文土器の小片が出土していたがこれで時期を特定できるものではないため不明としておく。



第13図 7トレンチ土層断面図



第14図 8トレンチ土壌断面図

(8) 8トレンチ(第14図)

墳丘北東側の緩斜面に設定されたものである。1m以上暗褐色粘質土が堆積し、竹林内であるためか竹根がおびただしく、土壤は根の影響で擾乱されている。その下部には砂層や砂質土が堆積し、Aso-4火碎流風化土壤の黄褐色粘質土(2層)はわずかに認められる程度である。以上のことから竹林の繁茂により土壤が擾乱されたと考えるよりは1層はAso-4火碎流風化土壤にまで及ぶ地形改変の後にもたらされた客土のようなもので、墳丘北側の緩斜面の中でも北端付近は造成された地形である疑いが出てきた。

2 墳丘周辺の土地に設定したトレンチ

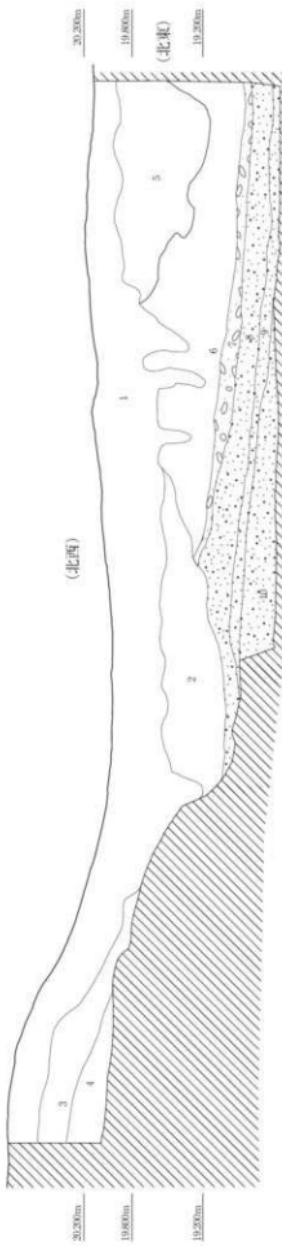
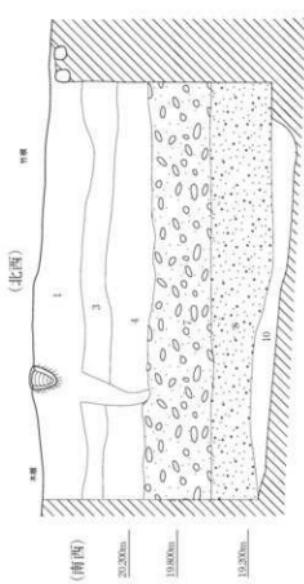
9～17トレンチについては、主に墳裾が古墳周辺の民有地に及ぶ可能性を考慮して設定したもの(9～13)、墳丘自体を触ることにより墳丘盛土の把握等を目的としたもの(14～17)に分かれる。前者については本稿で扱い、後者については次項で扱うこととする。9～13各トレンチの概況については以下のとおりである。

(1) 9トレンチ(第15図)

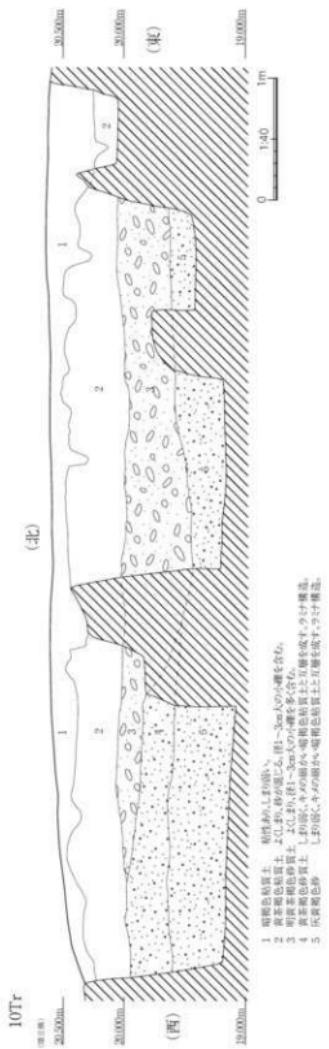
墳丘の北東、町有地内の平坦部から段差を挟んで民有地にかけて約15mのトレンチを設定し調査した。町有地側(第15図・上)では土層はほぼ水平に堆積し、民有地側(同・下)では土地境界の法面裾の地下で大きく掘り込まれる近世～近代の陶磁器片を含む溝状のもので大きく地形が変えられている。これを抜けると再び黄褐色粘質土の堆積が認められ、北東に向かって緩やかに傾斜している。

全体的に表土下の土はAso-4火碎流風化土壤及びその下位に見られる土壤であり、古墳に関係する土層は全く確認できなかった。ただし、トレンチ北東隅において暗褐色を呈する粘質土を埋土とする溝状の遺構が確認され、弥生土器及び古墳時代前期の土器が多く出土している。

その遺構も1層により削られていることから地形改変により原地形は大きく変化し、黄褐色粘質土まで到達するほどの深度で形成された遺構の一部が残されたと考えられるものである。



第15図 9トレント土壤断面図



第16図 10トレンチ土層断面図

(2) 10トレンチ(第16図)

10トレンチは墳丘東側の民有地内に設定されたもので、東西方向に約7mの長さになる。隣地は栗畑であり所々掘削できない部分があつたが深度約2mまで掘削している。表土下すぐにAso-4火砕流風化土壌の黄褐色粘質土が堆積し、その下部は黄褐色系の砂質土および砂層が堆積する。

表土下で黄褐色粘質土が露出することからこの地点も相当程度削平されており、古墳に関係する土層は確認できなかった。

(3) 11トレンチ(第17図)

11トレンチは6トレンチを拡張し、民有地方向及び墳丘東側の裏面に迫る部分にまで延長したものである。

10トレンチ同様全体的に削平が進んでおり、表土下で黄褐色粘質土が露出する。また、土地境界付近であるトレンチ中程では9トレンチで確認された近代の掘り込みが確認された。

地籍図にも水路として登記されているが、水は流れでおらず、他の地点においてもすべて埋め戻されているためこの水路とされる部分の目的はよくわからない。

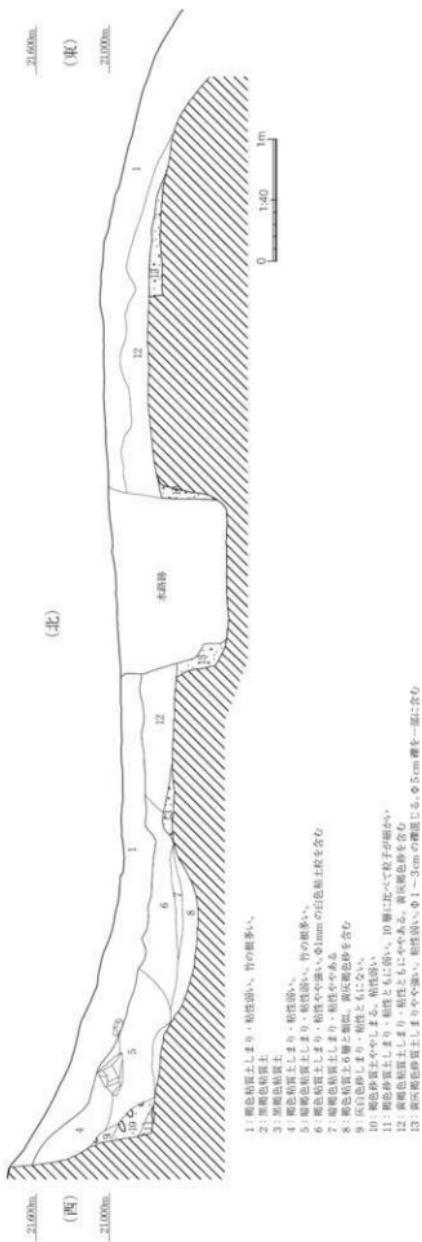
(4) 12トレンチ(第18図)

10トレンチの延長線上にあり、約10m東の土地の端に設定したものである。表土下に明褐色土、その下に灰黄褐色の砂質土が堆積する。10トレンチからの傾きとして1m程度の落差があり、上部を欠いているため詳細は不明であるが概ね周辺地形と同じように傾斜していると考えられる。

(5) 13トレンチ(第19図)

隣町の御船町で震災復興に伴う事業に係る調査で小坂大塚古墳(5世紀前半)の周溝が確認され、残存墳丘よりも遙かに大きい50m級の円墳であることが明らかとなった(上坂2018)。この結果を踏まえて井寺古墳も大型の円墳である可能性を考慮し、古墳南側の道路を挟んだ畑にトレンチを設定した。

この土地の東隣では以前地震後に住宅を建



第17図 11 トレンチ土層断面図

設することに伴い予備調査を実施した。その際道路の取り付け部分として掘削される予定であった土地の北側では10~12トレンチと同様の土層堆積状況であった一方で建物が建設される南側ではアカホヤ及び姶良丹沢火山灰(AT)由来の火山ガラスを含む暗褐色粘質土(ニガ土)に切り込む形で弥生時代の溝を確認している。検出面は地表下1mと住宅建設に伴う掘削深度よりも50cm以上下であったため本調査に至らなかったが、ここで重要なのは現況は平坦な畑であるところの北側と南側で土層の堆積状況が大きく異なる点にある。恐らくは南側部分においても北側と同じ土層が出るとは考えられるが1~1.5m以上下であると推定され、この土地のさらに南側にある断層崖に向かって大きく地形が傾くことが想定される。

こうした想定を踏まえて土地の南側では従来の地形が残存すると推定し、かつ大型の古墳であればこの残存部分に古墳の痕跡を認めうると踏んでのことであった。

結果としてはクロボク土こそ確認できなかつたがその下層にあるアカホヤ2次堆積土(6層)、黒ニガ(7層)、ニガ土(9層)、Aso-4火碎流風化土壌(11層)とこの地域近辺で見られる火山灰土由来の堆積状況であることが確認された。さらにニガ土を床面とした遺構も形成されており、井寺遺跡の構成要素も確認できた。

地形としてはトレンチ中程のあたりにおいて9~12層の傾きが南端までで1m以上下がっている。その上方に堆積する7層がこの大きな傾きを埋め、緩やかな斜面を形成した上に住居等の遺構が形成されている。

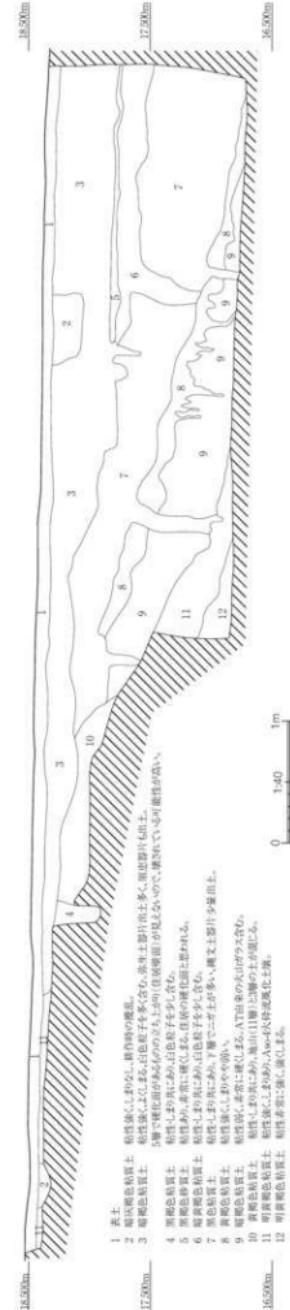
そうした成果は得られたものの、古墳に関係する土層は確認されなかつた。

12Tr



第18図 12 トレンチ土層断面図

13Tr



第19図 13 トレンチ土層断面図

3 残存墳丘に設定したトレンチ

田添トレンチ及び新たに設定した9～13トレンチにおいて古墳に関係する土層は確認できなかった。これまで残存墳丘に影響を与えないように配慮して調査を進めてきていたが、周溝やその他の墳端を示すものはともかく、墳丘構築土すら見いだせなかつたのは痛手であった。

このような状況から墳丘が削られた部分から古墳の痕跡を確認することは事実上不可能であるとの判断に達したこと、ここに至って古墳構築土の把握すらできていないことを踏まえ、方針を変更し残存墳丘において古墳構築土の把握をまず行い、そこから残存している可能性のある北側緩斜面での構築土の広がりを追っていくということとした。

こうした方針に従って北側緩斜面に14トレンチ、西側法面に15トレンチを設定し、まず15トレンチにおいて構築土の把握、続いて14トレンチにおいて構築土の広がりを追った。以下でその概況について述べる。

(1) 15トレンチ（第20図）

墳丘の西側、畑地（現駐車場）との境界において形成された法面の覆土を除去し、断面を調査し、墳丘構築土の把握を目的として設定されたものである。

保存の観点から法面全体を調査することは避け、残存の可能性が不明な北側については変化を明瞭に捉えるため幅約3mの調査区を設定し、土層の観察を行った。ここで確認された黒色土層の広がりを確認するため石室側（南）において溝状に覆土を除去し、間隔を開けてもう一つと2箇所のトレンチを設定した。これら3箇所をまとめて15トレンチと呼称する。

まず北側において覆土を除去し、土層の観察を行ったところこれまでのトレンチにおいて確認できなかつた層（3～9層）を確認した。Aso-4火碎流風化堆積物である黄褐色土層は基底の12層において確認され、その上部に形成された土層は一部残されていた。一方で表面近くにおいては他の地点同様古代～近世において削平されたことに伴い攪乱されており、3層よりも上部の墳丘構築土は消失している。

3層はしまりが弱く、4層はややしまりがあり、

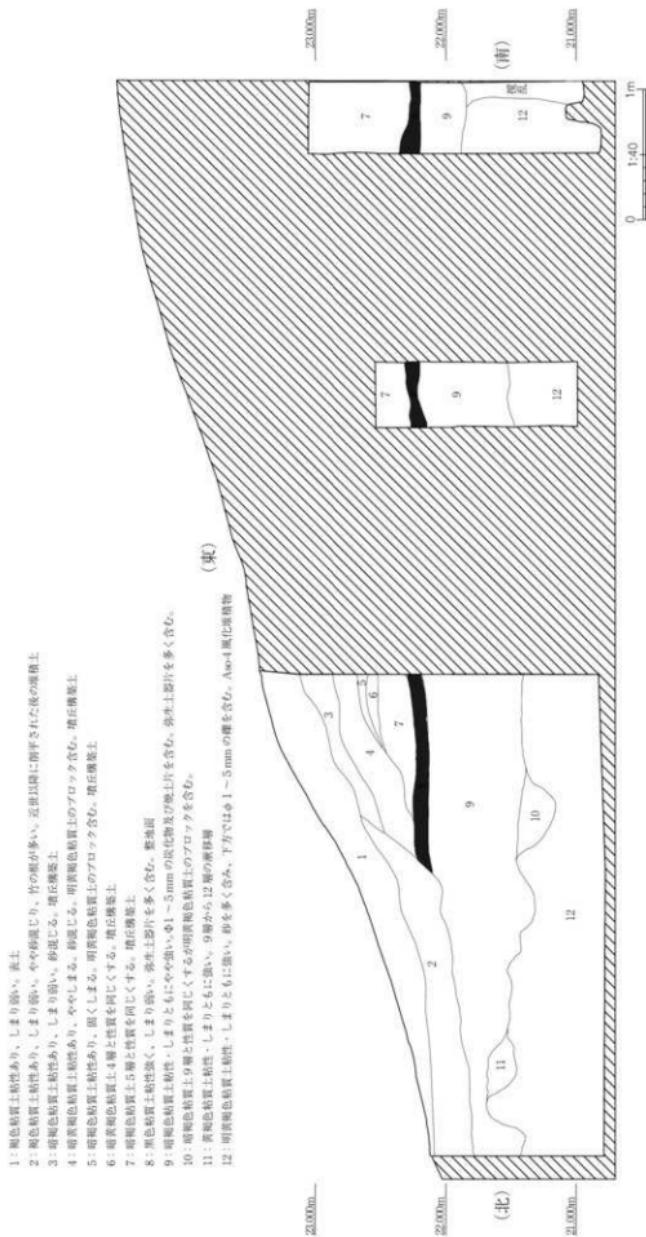
5～7層はかたくしまる。また5層と7層は土色・土質ともに類似するものであり、間に性質の異なる6層を挟むなど互層の関係にある。こうした所見から3～7層は古墳の構築土として認定した。

また、7層下において帯状の黒色土層が確認された。古墳の構築土下にあって、ほぼ水平に堆積しているながらも、クロボク等の火山灰堆積土とは様相が異なる点もあり扱いを決めかねていた。火山灰堆積土とは様相が異なると判断した点について、クロボク土が残存しているという前提に立つならば黄褐色土層の上に13トレンチで確認されたアカホヤ2次堆積層、ATを含むニガ土層がクロボク土層下に堆積するはずである。ところが8層以下の黄褐色土層（12層）までに挟まる土層は暗褐色粘質土（9層）が厚く堆積するのみである。当然自然營力により様々な土が混在する土層が形成された後にクロボク土層が形成されたことも考え得るが、周辺の土地を調査した限りではそうしたイベントが発生し得ない状況にあると考えた。これらを踏まえて少なくとも8層は人為的に形成された層であり、その層より上が古墳の構築土であることを考慮し、古墳の構築に先立って形成された層（整地面）ではないかとの推測に至った。

これらを確認するために石室側（南）に2箇所トレンチを設け、7層以下の土層を確認したところ、8～12層までの堆積状況を確認でき、8層が墳丘の勾配から構築土であれば石室方向に向かって上方へ傾くところがむしろ水平方向に伸びるという結果となり、その上層である7層については層厚を増し上方へ向かう傾向が認められた。

以上の点から8層は井寺丘陵の頂部付近を切り出すことによって造成された当時の整地面、3～7層は古墳の墳丘構築土との所見を得るに至った。ただし、9層の扱いについては保留とした。

第20図 15トレント土層断面図



(2) 14 トレンチ（第21図）

15 トレンチにおける所見を踏まえて、墳丘から民有地へ北に延びる緩斜面において古墳の墳丘構築土がどの範囲まで残存するか、その延長上において墳裾を定義づけるものを確認できるかということを目的として 14 トレンチを設定した。これまでのトレンチの中で最も延長が長い調査区となる。

平成 30 年度は上記の目的を達するために全面において掘削を行い、保存のため 15 トレンチ 8 層相当の土を確認できた時点でトレンチの東半分を掘削していった。

緩斜面は相当程度削られている周辺の土地に比べて、地表において古墳から不自然な変化を持たず自然な形で北へ傾いていたことから良好な保存状況にあると推定していた。

ところが実際に掘削を進めていったところ町有地との境界付近では 15 トレンチにおいて確認された攪乱がこちらにまで及んでいることが確認され、何かの基礎として使われたような石が数カ所にかたまって置かれていた。さらには町有地部分においては竹林化の影響を色濃く受けおり地表下約 40cm 程度は竹根により細かく粉砕され、一つの層として認識できないほどであった。それより下になると攪乱の度合いは薄くなりつつも根の影響により寸断されている状況が見て取れた。そうした状況にはあったが 15 トレンチ 8 層相当の黒色土帯をトレンチ南側端付近まで確認でき、墳丘側の断面では黒色土帯の上部に墳丘構築土を確認することが出来た。

国の装飾古墳ワーキンググループが当古墳の視察に訪れた際、委員長の和田清吾氏から黒色土帯下位の堆積状況についても把握しておくべきであること、また、黒色土帯が整地面であるとすれば、墳丘東側においても黒色土帯が確認できるはずなのでそのことを確認るべきである旨助言を受けた。

これを踏まえて検討委員会に諮り 14 トレンチ南側の再掘削と 16、17 トレンチの掘削を計画し、現状変更届を提出し許可後掘削した。

当初黒色土帯として 32 層と 28・29 層はその間に樹根による攪乱を挟んで同一のものと捉えていたところが、掘削を進めた結果 32 層は 15

トレンチ 8 層と同じくほぼ水平方向に堆積していることが、28・29 層は古墳の墳丘構築土であることが判明した。

また、民有地境界付近において溝状の落ち込みを 2 箇所確認した。一つは黒色土帯を切り込むように掘削され、埋土中に黒色土帯を巻き込んでいる（16・17 層）。整地面を切り込んだ溝状造構であることから周溝の可能性があると考え色めき立ったが、15 トレンチで確認できな（攪乱が噛んでいるため）こと、その後掘削した 16 トレンチで延長を確認できなかったこと、周溝にしては掘削面が不整であることなどから結果的には後世の造構に伴うものと判断された。もう一つについてはその北側にあり、確認当初は前記のものとのいずれかが周溝ではないかと期待したところではあったが精査するうちに溝の埋土である 36～41 層は黒色土帯（32 層）の下に形成されており、黒色土帯を切ることが無い点、その北にある土坑状の造構は黒色土帯を切り込んでいる点を考慮し、黒色土帯が形成される以前、つまり弥生時代に形成されたものであるとの結論に至った。

平成 31 年度の調査により、黒色土帯下の 42 層を掘削し黄褐色土（49 層）を露出させた時点で焼土面を伴う造構埋土を確認した。限られた範囲での検出面であるため造構の性質は不明であるが炉を有する住居ではないかと推測する。黒色土帯下の暗褐色土にこの造構の切り込み面を確認できなかったため、造構覆土と暗褐色土の関係については不明である。今回の調査趣旨と異なることから平面の検出及び記録に留めこれ以上の掘削は実施しなかったが、井寺古墳が造営される前の井寺遺跡を構成する造構であることは疑いなく、当時の生活面は 42 層付近を地表とする可能性、これらを削って平坦面を構築し黒色土帯（32 層）が形成、その上に古墳の墳丘構築土（21～31）が造営されたものとみることができる。

ただし、最も期待された墳裾を裏付けるものの（周溝・葺石）は存在せず、墳端を示す土層の堆積は竹林の根により攪乱されていることもあって墳丘の規模を示す根柢はほぼ皆無であることがわかった。

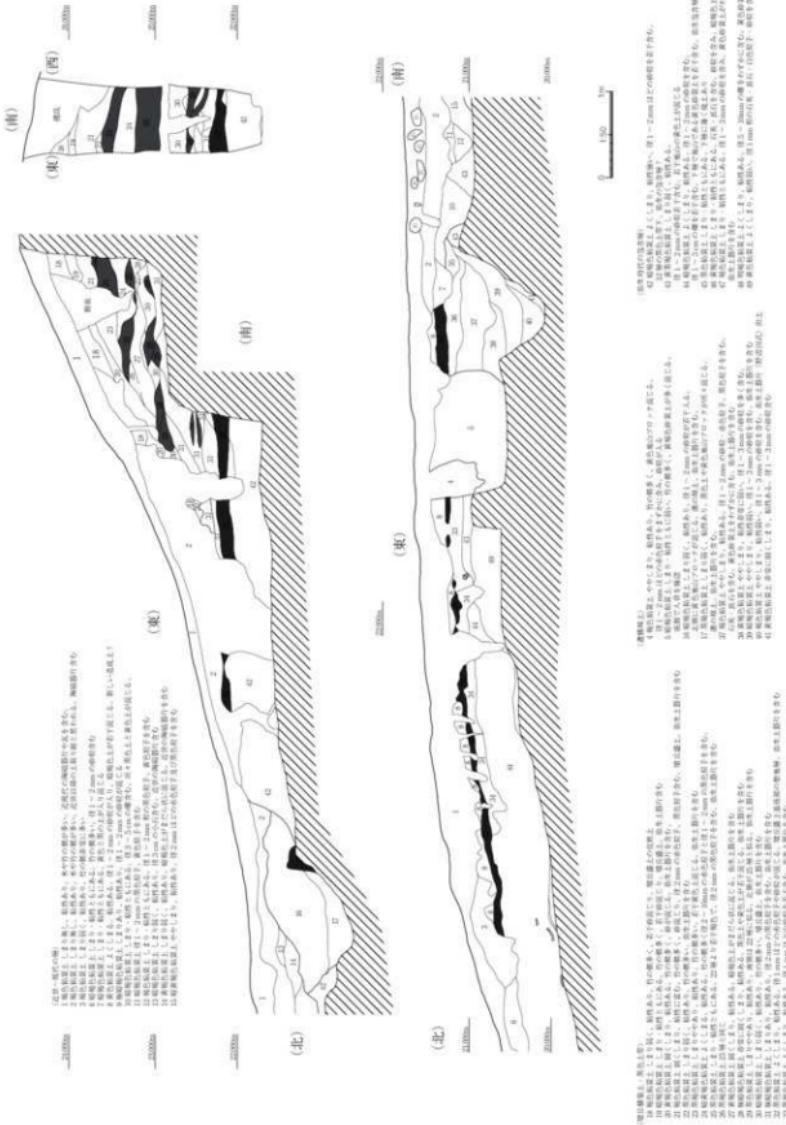
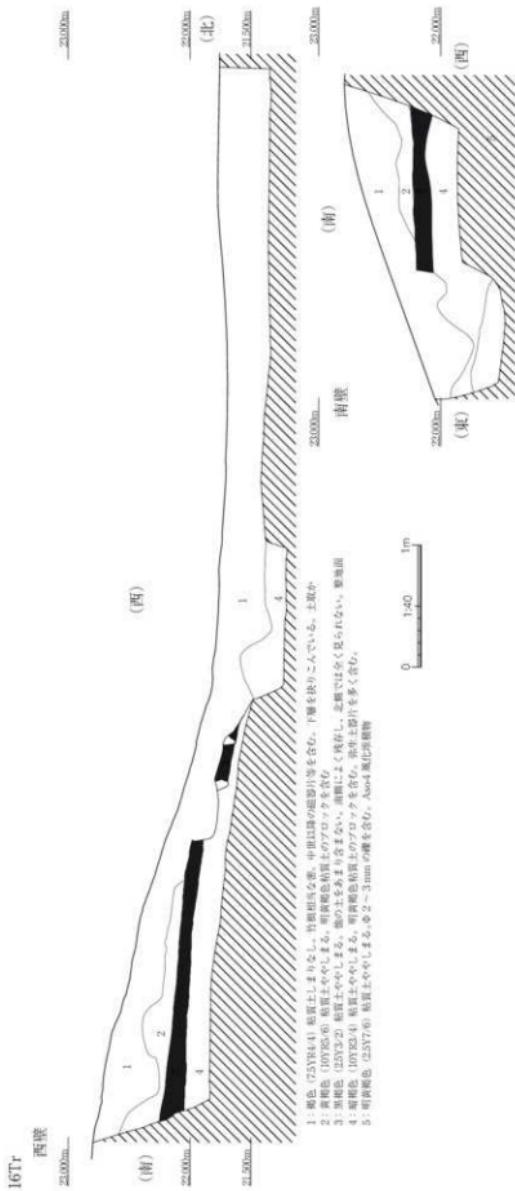


Fig. 21-14 Trenz soil profile

第22図 16トレーナー土壌断面図



(3) 16 トレンチ (第 22 図)

14 トレンチで確認された溝状遺構が古墳の周囲を巡るのかという点と、地形測量の際に 16 トレンチが位置する部分が墳丘のくびれ部のように見えることから前方後円墳ではないかと言われていることについての検証を目的として設定した。結果墳丘側において 14 トレンチで黒色土帯が確認された高さにおいて同層を確認し、それがトレンチ南端から約 2 m 北・南西端から約 1 m 東において擾乱によって途切れること、14 トレンチにおいて溝状遺構を確認した位置からの延長上に当たる部分において同様の遺構を認めなかつたことを確認した。

(4) 17 トレンチ (第 23 図)

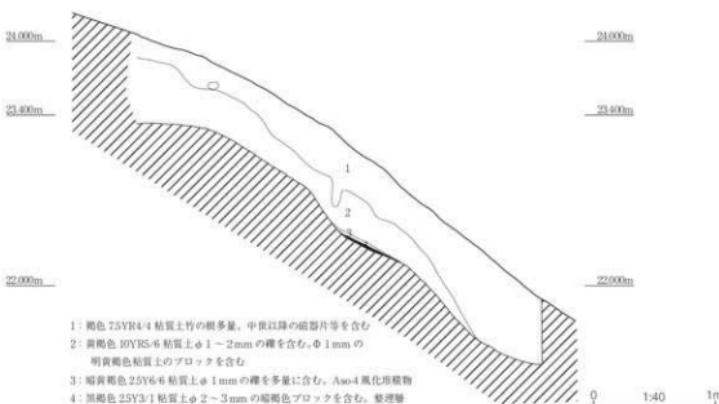
14・15 トレンチで確認された黒色土帯が墳丘の東側でも確認されるか、あったとすれば想定どおり平坦に堆積するものなのかを確認することを目的として 11 トレンチにほど近くの位置に石室の東西軸に沿う形で 17 トレンチを設定した。東側は後世において現地表面まで大きく削られていることは明らかであったので、これを掘削する作業は大変な危険を伴うものであった。

そのため掘削深度を黒色土帯及び墳丘構築土を表面的に確認する程度に留めておく必要が生じ、結果として表土から 50cm 程度掘削したに留まる。1, 2 層は非常に柔らかくしまりがな

いことを確認した。

特に墳丘形状の根拠となるくびれ部か否かという点においては、16 トレンチの存在する部分は黒色土帯がかろうじて残存するほか上部は失われているなど相当程度削平が及んでおり、本来ならば黒色土帯の堆積方向に向かって北・東に向かって平坦に伸びていくことが予想される。さらに 3 トレンチにおける状況を加味すると、この周辺は墳丘構築後に大きく削られた結果生じた形状であると断定できた。以上の点において、当古墳が前方後円墳である可能性は無くなつたと言える。

いことから墳丘構築土ではないとの判断に達し、これを除去した面において黒色土帯（4 層）を確認した。高さも 14・15 トレンチで確認した高さではほぼ一致し、黒色土帯が丘陵の形状とは関係なくほぼ水平に堆積していることが証明され、この層が古墳構造に先立って行われた整地に伴う層であることが確定的となった。



第 23 図 17 トレンチ土層断面図

第3節 出土遺物

トレンチ内から多くの遺物が出土した。ただし、多くは後世の搅乱を受けた表土付近の土層から出土するものである。時代は縄文時代～近世と幅広い。

1 縄文時代（第24図）

13トレンチ及び15トレンチで出土した。小片であり詳細は不明であるがいずれも縄文時代後期のものである。



第24図 トレンチ出土遺物（縄文時代）

第1表 トレンチ出土遺物観察表

種別 区分	トレンチ 番号	遺構 区分	出土 位置	区分	時期	基壇	雨庇	口縁 径	底径 径	高さ (cm)	素材	色調(外)	色調(内)	調整(外)	調整(内)	既成	備考
1	13	-	8 突起土器	縄文	直筒	深窓	口縁～脚部	-	-	(0.3)	長石、角閃石、雲母	Rust/0001/3	Rust/0001/3	ナゲ、E角鏡	ナゲ	良好	
2	13	-	3 突起土器	縄文	直筒	深窓	脚部～脚部	-	-	(5.4)	長石、角閃石、雲母	Rust/033/1	Rust/033/1	ナゲ	ナゲ	良好	

2 弥生時代中期の遺物

出土する遺物で最も多いのは弥生時代のものである。多くは古墳造営時に掘削された際に巻き上げられたものが後世の搅乱によって表土付近の層に混ざるものであるが、これらの掘削を免れ遺構として残存するものも存在する。

(1) 墓棺（3～8,49）

弥生時代の土器片に伴って墓棺片も出土している。小片に限らず大きなものも含まれていることから、墳丘のある周辺からもたらされたものと考えられ、周間に墓棺群が存在する可能性が考えられる。

(2) 墓（9～27,50）

墓棺に比べて径が小さく、日常的な用途に用いられた器種である。弥生時代中期の墓の特徴を有しており、ただし小片であり全体をよく残すものはほとんど存在しない。

(3) 精製土器（28～33）

日常用途とは異なる装飾などを施された土器の一群も出土している。後述の高坏等とともに用いられたものと考えられる。

ア 鉢

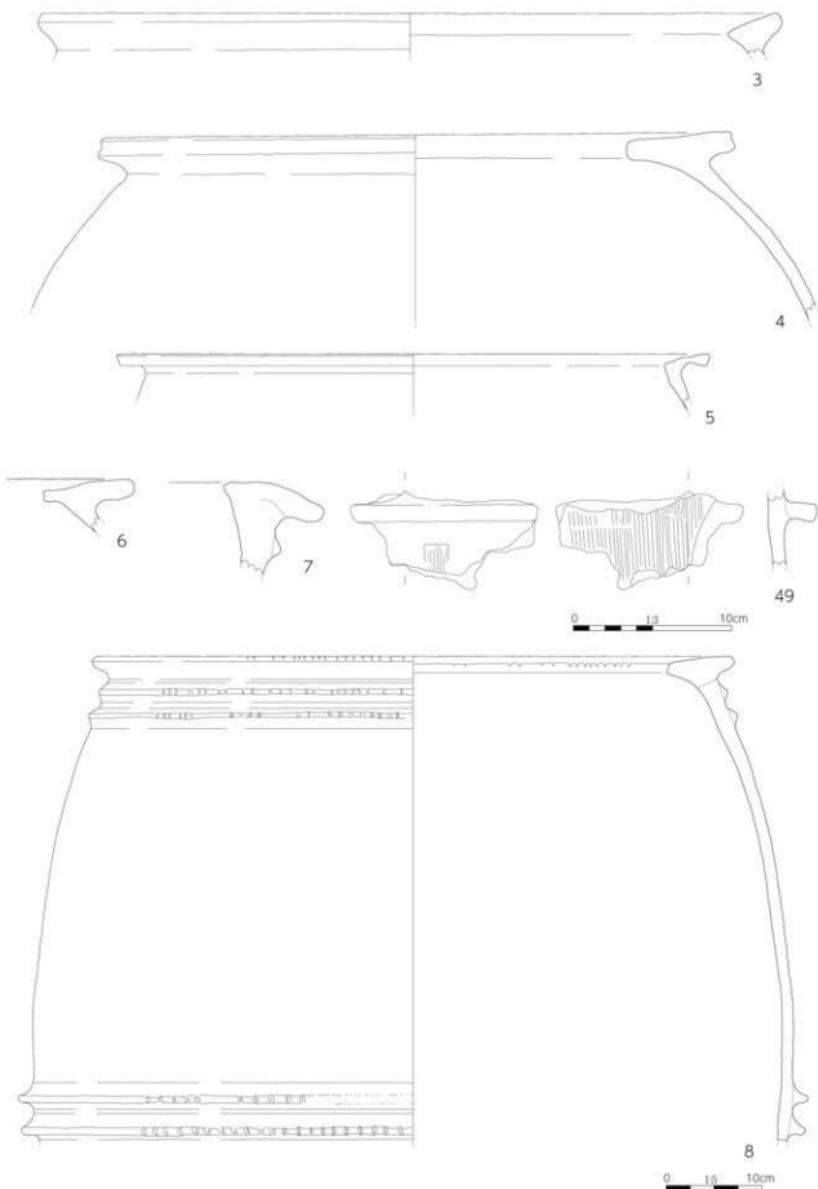
口縁部直下に刻目のある突帯を巡らす。口唇部はナゲられて斜交する稜を持つ。口縁部は基本ハケ目であるが一部には暗文様のヘラミガキが放射状に施されるものも含まれる。概して精製であり、器面も滑らかなものが多い。

イ 墓

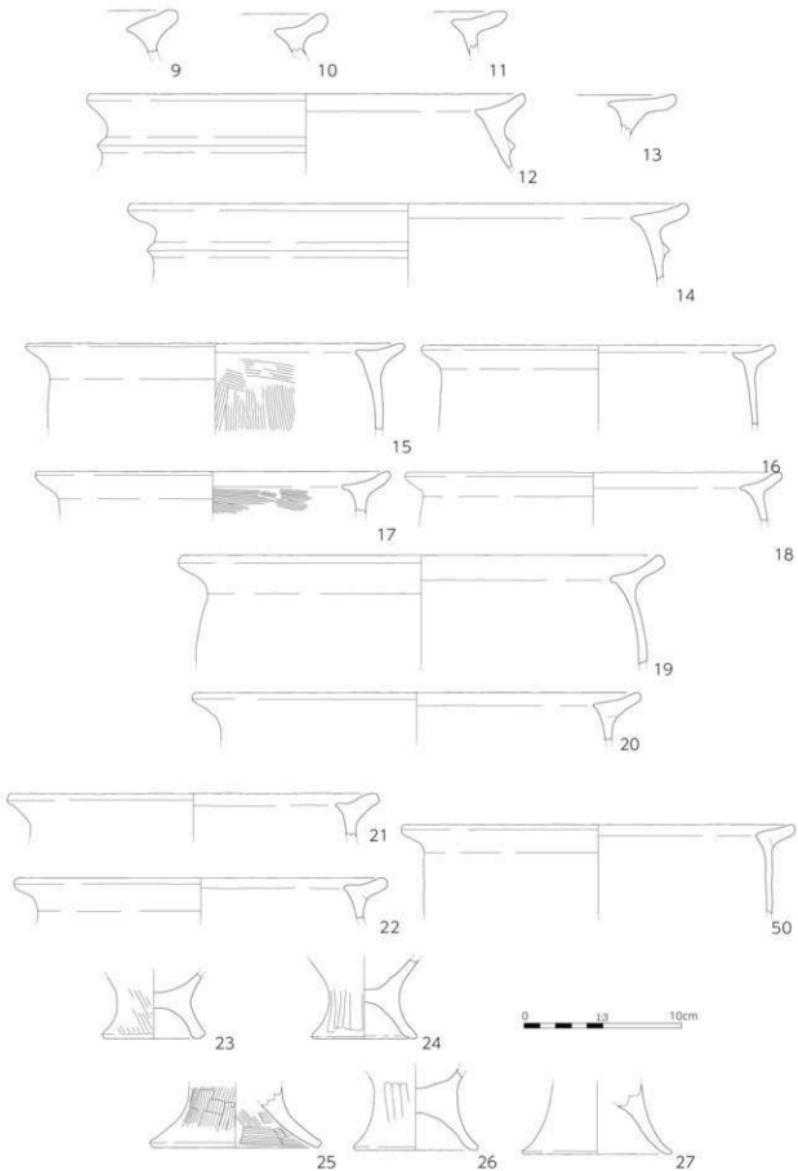
形状は日常用途の墓とはほぼ同じくするが、調整が丁寧であり、口縁部に放射状のヘラミガキを施すこと、器面の内外に赤彩をほどこすなど用途の違いを示している。

(4) 高坏（34～43）

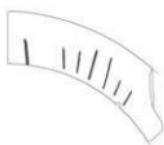
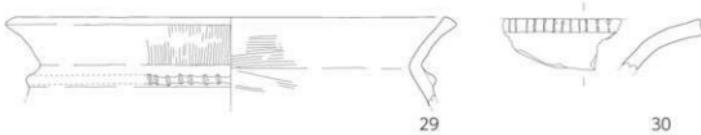
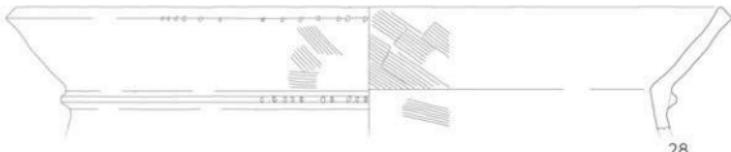
完形で出土するものはなかったが、ある程度の個体を確認できるものを図示している。口縁部が肥厚するものから先鋭化、平滑化していく変化が見られ、坏部の法量も口縁径が比較的小さいもので深さがあるものから口縁径が広がり浅くなる傾向のものが大半を占めていることから中期中頃が最も中心的な時期ではないかと推測する。



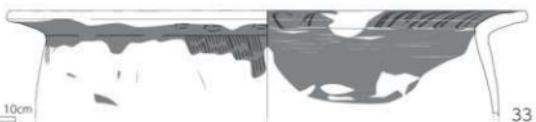
第 25 図 トレンチ内出土遺物実測図（弥生時代）1



第 26 図 トレンチ内出土遺物実測図 (弥生時代) 2

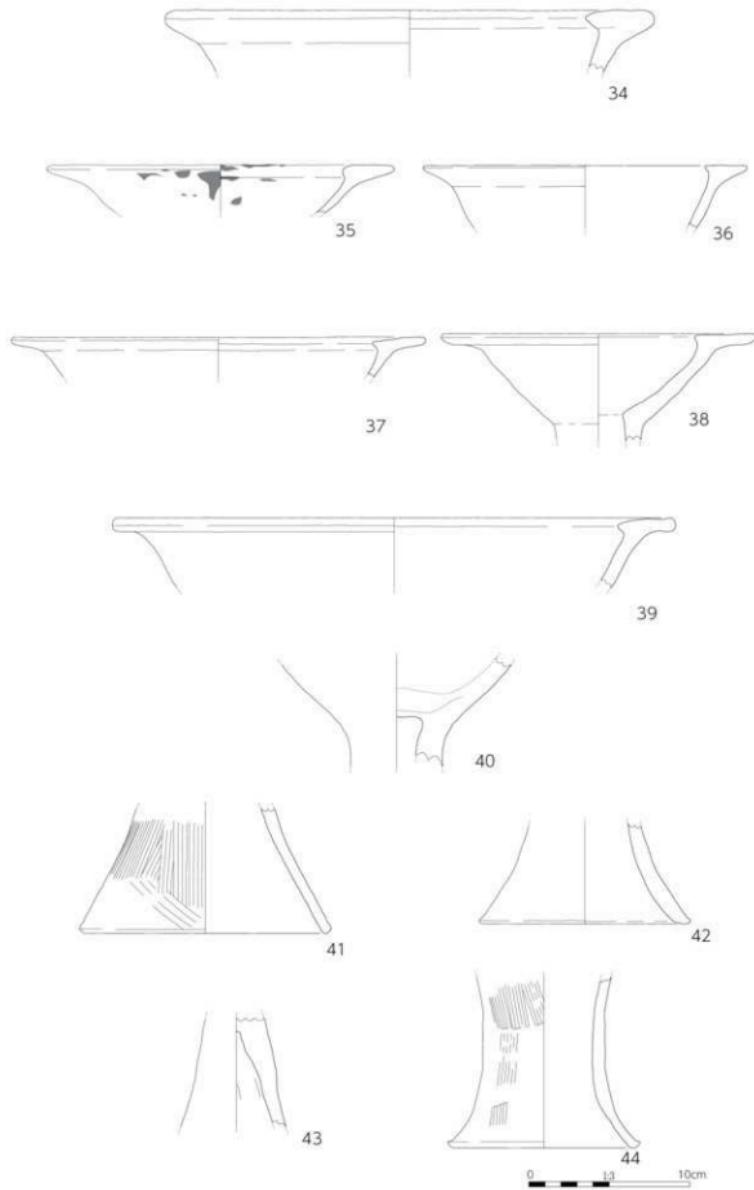


32

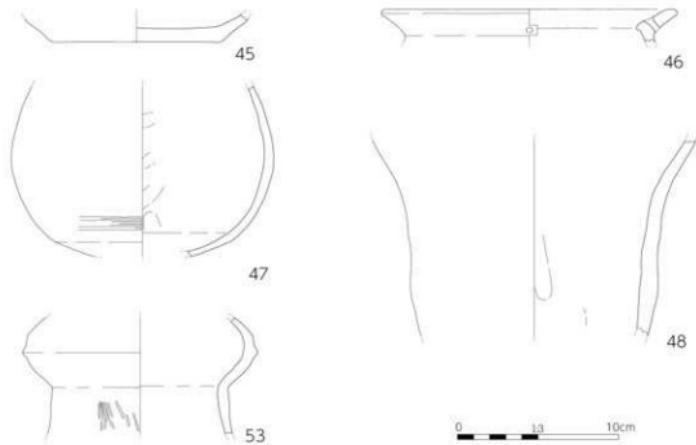


33

第27図 トレンチ内出土遺物実測図（弥生時代）3



第28図 トレンチ内出土遺物実測図(弥生時代)4



第29図 トレンチ内出土遺物実測図 (弥生時代) 5

(5) 器台 (44)

胴部中頃がやや肥厚するが、概ね裾から頭部にかけて均質な厚みになるように整形されている。時期的にも高坏のものとほぼ矛盾しない時期観であると考える。

3 弥生時代後期の遺物 (第30図)

中期の遺物に比べて量が少なく、小片も多いが弥生後期に属する遺物も出土している。

(1) 壺

外器面にタタキ目がある長胴の壺である。破片であり底部を欠くので脚台が付くものかは不明である。

(2) 壺

ア 壺 口縁部のみで全体は不明であるが、壺に比べて口がラッパ状に広くひろがる。

イ 重弧文壺 小片のみで詳細は不明であるが、免田式土器のような重弧文が外器面に施された土器である。

4 古墳時代の遺物 (第31図)

調査中は弥生土器優勢のように感じていたため、気づかなかつたが整理を進めていくうちに古墳時代に属する遺物も少量であるが出土している。

(1) 壺 (60～62)

若干長胴気味のもの (60)、球形胴のもの (61～62) が見られる。内外器面ともにハケ目調整である。

(2) 壺 (64～66)

64～66は二重口縁壺である。64、65は口縁部～頭部、66は口縁部のみの出土となる。調整は丁寧であり、ナデられて他の調整痕は見えないが、66の内器面に一部ハケ目が認められる。

(3) 高坏 (67～71)

壺部を失っているため不明であるが、短脚の高坏で台付鉢の形状を取るものかと思われる。70には脚の中頃に穿孔が2カ所施される。

(4) 坏 (72)

丸みを帯びた底部の坏である。調整は丁寧でありやや精製的印象を受ける。外器面に黒斑を有する。

4 古代の遺物 (第32図)

13トレンチのものを除けば表土付近の搅乱土中から出土したものである。坏や椀、壺にともなって高坏、布目瓦なども含まれる。ほとんどが2次的なものであり原位置を失っているものであるが、墳丘の改変に伴って入り込んできたものと考えられる。

5 中世の遺物

古代の遺物同様表土付近の擾乱土から出土している。摺鉢（86～92）や火鉢（93）などの瓦質土器が多く、貿易陶磁（96～97）も含まれる。

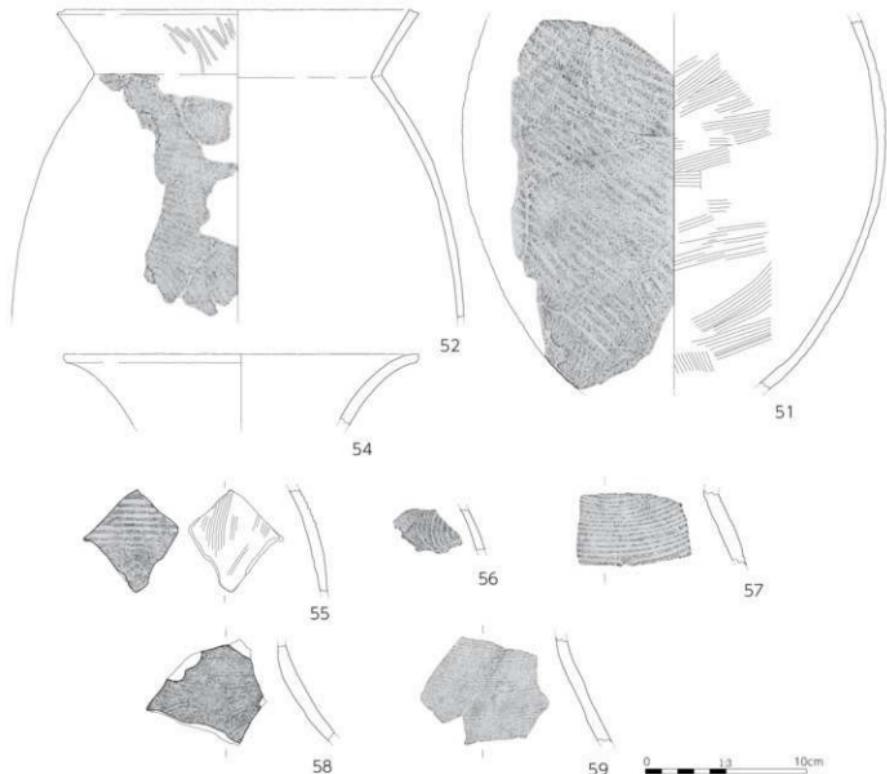
6 近世～近代の遺物

表土付近の擾乱土中に多く含まれる。他の時代のものに比べて破片の角が鋭く、搅拌による摩滅をほとんど受けていない。これら遺物は墳丘上で行われた最終的な地形変更に伴うものであると考えられ、その他の時期の遺物に関して

第2表 トレンチ内出土遺物観察表(弥生時代-1)

回復回数	遺物	出土位置	区分	時期	器種	部位	口径 (cm)	底径 (cm)	高さ (cm)	断面材	色調(外)	色調(内)	調整(外)	調整(内)	地成	備考
00 6	-	-	弥生土器	弥生	中腹	便器	口縁～底部	147.0	-	(2.6)	灰白、白色系、直線	灰白	Hue357.0/Hue357.7	Hue357.7	ナダ	良好
04 8	-	-	弥生土器	弥生	中腹	便器	口縁～底部	20.8	-	(11.0)	灰白、白色系、直線	灰白	Hue357.0/Hue357.7	Hue357.7	ナダ	良好
03 13	-	5	弥生土器	弥生	中腹	便器	口縁～底部	127.0	-	(3.2)	灰白、白色系、直線	灰白	Hue357.0/Hue357.7	Hue357.7	ナダ	良好
06 14	-	2	弥生土器	弥生	中腹	便器	口縁～底部	-	-	(3.3)	灰白、白色系、直線	灰白	Hue357.0/Hue357.7	Hue357.7	ナダ	良好
07 2	-	-	弥生土器	弥生	中腹	便器	口縁～底部	-	-	(3.0)	灰白、白色系、直線	灰白	Hue357.0/Hue357.7	Hue357.7	ナダ	良好
06 8	-	-	弥生土器	弥生	中腹	便器	口縁～底部	60.2	-	(45.5)	灰白、白色系、直線	灰白	Hue357.0/Hue357.7	Hue357.7	ナダ	良好
09 8	-	1	弥生土器	弥生	中腹	便器	口縁～底部	-	-	(2.2)	灰白、白色系、直線	灰白	Hue357.0/Hue357.7	Hue357.7	ナダ	良好
20 1	-	-	弥生土器	弥生	中腹	便器	口縁～底部	-	-	(2.0)	灰白、白色系、直線	灰白	Hue357.0/Hue357.7	Hue357.7	ナダ	良好
11 7	-	1	弥生土器	弥生	中腹	便器	口縁～底部	127.6	-	(2.2)	灰白、白色系、直線	灰白	Hue357.0/Hue357.7	Hue357.7	ナダ	良好
22 16	-	1	弥生土器	弥生	中腹	便器	口縁～底部	127.6	-	(4.2)	灰白、白色系、直線	灰白	Hue357.0/Hue357.7	Hue357.7	ナダ	良好
13 4	-	1	弥生土器	弥生	中腹	便器	口縁～底部	-	-	(2.3)	灰白、白色系、直線	灰白	Hue357.0/Hue357.7	Hue357.7	ナダ	良好
14 14	漁1	16	弥生土器	弥生	中腹	便器	口縁～底部	125.2	-	(4.0)	灰白、白色系、直線	灰白	Hue357.0/Hue357.7	Hue357.7	ナダ	良好
15 17	-	1	弥生土器	弥生	中腹	便器	口縁～底部	127.8	-	(3.4)	灰白、白色系、直線	灰白	Hue357.0/Hue357.7	Hue357.7	ナダ	良好
16 11	8	9	弥生土器	弥生	中腹	便器	口縁～底部	122.2	-	(3.0)	灰白、白色系、直線	灰白	Hue357.0/Hue357.7	Hue357.7	ナダ	良好
17 14	-	2	弥生土器	弥生	中腹	便器	口縁～底部	122.4	-	(2.0)	灰白、白色系、直線	灰白	Hue357.0/Hue357.7	Hue357.7	ナダ	良好
20 16	-	3	弥生土器	弥生	中腹	便器	口縁～底部	123.6	-	(3.0)	灰白、白色系、直線	灰白	Hue357.0/Hue357.7	Hue357.7	ナダ	良好
19 13	-	5	弥生土器	弥生	中腹	便器	口縁～底部	109.6	-	(3.0)	灰白、白色系、直線	灰白	Hue357.0/Hue357.7	Hue357.7	ナダ	良好
20 14	漁1	1	弥生土器	弥生	中腹	便器	口縁～底部	122.2	-	(3.0)	灰白、白色系、直線	灰白	Hue357.0/Hue357.7	Hue357.7	ナダ	良好
21 8	-	1	弥生土器	弥生	中腹	便器	口縁～底部	123.4	-	(2.2)	灰白、白色系、直線	灰白	Hue357.0/Hue357.7	Hue357.7	ナダ	良好
22 17	-	1	弥生土器	弥生	中腹	便器	口縁～底部	123.8	-	(3.0)	灰白、白色系、直線	灰白	Hue357.0/Hue357.7	Hue357.7	ナダ	良好
23 14	-	2	弥生土器	弥生	中腹	便器	口縁～底部	122.4	-	(2.0)	灰白、白色系、直線	灰白	Hue357.0/Hue357.7	Hue357.7	ナダ	良好
24 16	-	3	弥生土器	弥生	中腹	便器	口縁～底部	123.3	-	(2.3)	灰白、白色系、直線	灰白	Hue357.0/Hue357.7	Hue357.7	ナダ	良好
25 17	-	5	弥生土器	弥生	中腹	便器	口縁～底部	123.3	-	(2.3)	灰白、白色系、直線	灰白	Hue357.0/Hue357.7	Hue357.7	ナダ	良好
26 1	-	-	弥生土器	弥生	中腹	便器	口縁～底部	-	-	(3.0)	灰白、白色系、直線	灰白	Hue357.0/Hue357.7	Hue357.7	ナダ	良好
27 14	-	1	弥生土器	弥生	中腹	便器	口縁～底部	123.1	-	(3.0)	灰白、白色系、直線	灰白	Hue357.0/Hue357.7	Hue357.7	ナダ	良好
28 16	-	2	弥生土器	弥生	中腹	便器	口縁～底部	123.0	-	(3.0)	灰白、白色系、直線	灰白	Hue357.0/Hue357.7	Hue357.7	ナダ	良好
29 13	-	3	弥生土器	弥生	中腹	便器	口縁～底部	123.6	-	(3.0)	灰白、白色系、直線	灰白	Hue357.0/Hue357.7	Hue357.7	ナダ	良好
30 14	漁2	20	弥生土器	弥生	中腹	便器	口縁～底部	108.0	-	(3.0)	灰白、白色系、直線	灰白	Hue357.0/Hue357.7	Hue357.7	ナダ	良好
25 14	漁1	5	弥生土器	弥生	中腹	便器	口縁～底部	110.0	-	(3.0)	灰白、白色系、直線	灰白	Hue357.0/Hue357.7	Hue357.7	ナダ	良好
26 1	-	-	弥生土器	弥生	中腹	便器	口縁～底部	-	-	(2.0)	灰白、白色系、直線	灰白	Hue357.0/Hue357.7	Hue357.7	ナダ	良好
27 14	-	1	弥生土器	弥生	中腹	便器	口縁～底部	79.47	(4.4)	-	灰白、白色系、直線	灰白	Hue357.0/Hue357.7	Hue357.7	ナダ	良好
28 16	-	2	弥生土器	弥生	中腹	便器	口縁～底部	144.6	(7.3)	-	灰白、白色系、直線	灰白	Hue357.0/Hue357.7	Hue357.7	ナダ	良好
29 8	-	3	弥生土器	弥生	中腹	便器	口縁～底部	127.0	(3.3)	-	灰白、白色系、直線	灰白	Hue357.0/Hue357.7	Hue357.7	ナダ	良好
30 4	-	4	弥生土器	弥生	中腹	便器	11.0	-	-	(3.1)	灰白、白色系、直線	灰白	Hue357.0/Hue357.7	Hue357.7	ナダ	良好
31 8	-	5	弥生土器	弥生	中腹	便器	口縁～底部	141.0	(7.0)	-	灰白、白色系、直線	灰白	Hue357.0/Hue357.7	Hue357.7	ナダ	良好
32 16	-	8	弥生土器	弥生	中腹	便器	口縁～底部	126.4	(2.3)	-	灰白、白色系、直線	灰白	Hue357.0/Hue357.7	Hue357.7	ナダ	良好
33 14	-	42	弥生土器	弥生	中腹	便器	口縁～底部	122.0	(6.5)	-	灰白、白色系、直線	灰白	Hue357.0/Hue357.7	Hue357.7	ナダ	良好
34 8	-	49	弥生土器	弥生	中腹	便器	口縁～底部	120.0	(3.0)	-	灰白、白色系、直線	灰白	Hue357.0/Hue357.7	Hue357.7	ナダ	良好
35 16	-	51	弥生土器	弥生	中腹	便器	口縁～底部	121.4	(2.0)	-	灰白、白色系、直線	灰白	Hue357.0/Hue357.7	Hue357.7	ナダ	良好
36 8	-	52	弥生土器	弥生	中腹	便器	口縁～底部	120.0	(4.1)	-	灰白、白色系、直線	灰白	Hue357.0/Hue357.7	Hue357.7	ナダ	良好
37 5	-	53	弥生土器	弥生	中腹	便器	口縁～底部	120.4	(2.5)	-	灰白、白色系、直線	灰白	Hue357.0/Hue357.7	Hue357.7	ナダ	良好
38 11	-	54	弥生土器	弥生	中腹	便器	口縁～底部	119.2	(6.0)	-	灰白、白色系、直線	灰白	Hue357.0/Hue357.7	Hue357.7	ナダ	良好
39 10	-	55	弥生土器	弥生	中腹	便器	口縁～底部	120.8	(4.3)	-	灰白、白色系、直線	灰白	Hue357.0/Hue357.7	Hue357.7	ナダ	良好
40 11	-	56	弥生土器	弥生	中腹	便器	口縁～底部	121.4	(6.7)	-	灰白、白色系、直線	灰白	Hue357.0/Hue357.7	Hue357.7	ナダ	良好
41 14	-	57	弥生土器	弥生	中腹	便器	口縁～底部	115.4	(2.7)	-	灰白、白色系、直線	灰白	Hue357.0/Hue357.7	Hue357.7	ナダ	良好
42 13	-	58	弥生土器	弥生	中腹	便器	口縁～底部	113.0	(6.2)	-	灰白、白色系、直線	灰白	Hue357.0/Hue357.7	Hue357.7	ナダ	良好
43 17	-	59	弥生土器	弥生	中腹	便器	口縁～底部	-	-	(2.0)	灰白、白色系、直線	灰白	Hue357.0/Hue357.7	Hue357.7	ナダ	良好
44 14	漁2	60	弥生土器	弥生	中腹	便器	口縁～底部	-	-	(11.6)	灰白、白色系、直線	灰白	Hue357.0/Hue357.7	Hue357.7	ナダ	良好
45 4	-	1	弥生土器	弥生	中腹	便器	口縁～底部	-	-	(1.7)	灰白、白色系、直線	灰白	Hue357.0/Hue357.7	Hue357.7	ナダ	良好
46 13	-	5	弥生土器	弥生	中腹	便器	口縁～底部	128.2	-	(3.0)	灰白、白色系、直線	灰白	Hue357.0/Hue357.7	Hue357.7	ナダ	良好
47 14	-	2	弥生土器	弥生	中腹	便器	口縁～底部	-	-	(12.4)	灰白、白色系、直線	灰白	Hue357.0/Hue357.7	Hue357.7	ナダ	良好
48 14	-	2	弥生土器	弥生	中腹	便器	口縁～底部	-	-	(12.1)	灰白、白色系、直線	灰白	Hue357.0/Hue357.7	Hue357.7	ナダ	良好
49 4	-	4	弥生土器	弥生	中腹	便器	口縁～底部	-	-	(4.0)	灰白、白色系、直線	灰白	Hue357.0/Hue357.7	Hue357.7	ナダ	良好
50 15	-	2	弥生土器	弥生	中腹	便器	口縁～底部	124.0	-	(3.0)	灰白、白色系、直線	灰白	Hue357.0/Hue357.7	Hue357.7	ナダ	良好
52 14	-	47	弥生土器	弥生	中腹	便器	口縁～底部	-	-	(7.2)	灰白、白色系、直線	灰白	Hue357.0/Hue357.7	Hue357.7	ナダ	良好

は、近世の土取り等により大きく削られた結果
近世遺物と混ざって出土するものと考えられ
る。



第30図 ベンチ内出土遺物実測図(弥生時代-2)

第3表 ベンチ内出土遺物観察表(弥生時代-2)

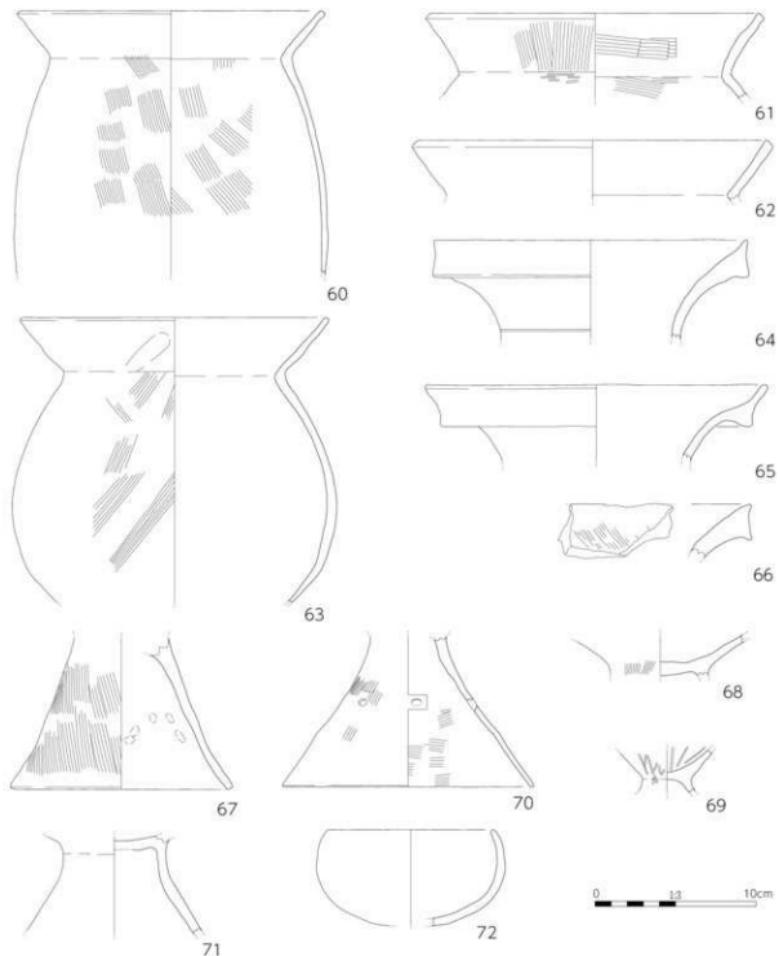
標 印 番 号	ト レ ン チ	遺 物	目 上 下 限	区分	時 期	器 種	断 面	口 径 (cm)	底 径 (cm)	高 さ (cm)	泥 和 材	色 調 (外)	色 調 (内)	調整 (外)	成 形	備 考
51	14	-	42	弥生上層	弥生	直腹	盤	-	-	12.3	青白、白色斑状 青白、白色斑状	淡青白 淡青白	Han103/3 Han103/3	ナゾ、タタリ ナゾ、ハケ目	直腹面に横筋あり、縫合 直腹	
52	6	-	-	弥生上層	弥生	直腹	盤	138.0	138.0	22.0	青白、内閃光、青白 青白、内閃光、青白	淡青白 淡青白	Han103/3 Han103/3	ナゾ、タタリ ナゾ、ハケ目	直腹	
53	18	-	3	弥生上層	弥生	直腹	盤	121.0	-	14.0	長石、青白、内閃光 青白、青白、内閃光	青 青	Han2.35/3.8 Han2.35/3.8	ナゾ	直腹	
55	8	-	1	弥生上層	弥生	直腹	盤	-	-	16.0	青白、青白、内閃光 青白、青白、内閃光	青白 青白	Han103/3 Han103/3	ナゾ、ハケ目 ナゾ、ハケ目	直腹面に横筋有 直腹	
56	8	-	1	弥生上層	弥生	直腹	盤	94.0	-	12.0	長石、青白、内閃光 青白、青白、内閃光	青白 青白	Han103/3 Han103/3	ナゾ	直腹	
57	13	-	5	弥生上層	弥生	直腹	盤	98.0	-	14.0	長石、青白、内閃光 青白、青白、内閃光	青白 青白	Han103/3 Han103/3	ナゾ ナゾ	直腹	
58	7	-	1	弥生上層	弥生	直腹	盤	94.0	-	15.0	赤色光沢 赤色光沢	赤 赤	Han2.35/3.8 Han2.35/3.8	ナゾ ナゾ	直腹	
59	4	-	1	弥生上層	弥生	直腹	盤	94.0	-	16.0	青白、青白、内閃光 青白、青白、内閃光	青白 青白	Han2.35/3.8 Han2.35/3.8	ナゾ、ハケ目 ナゾ、ハケ目	直腹	直腹

4 井寺古墳から出土する遺物について

トレンチ調査によって出土した遺物の全ては、井寺古墳造営前後のものを含まず、造営以前に存在したもの、造営後何らかの形で古墳に残されたものである。

これら遺物の時期については、かつて地震後の住宅建て替えの際に調査した井寺遺跡の結果とほぼ矛盾せず（橋口 2019）、元々この地点に

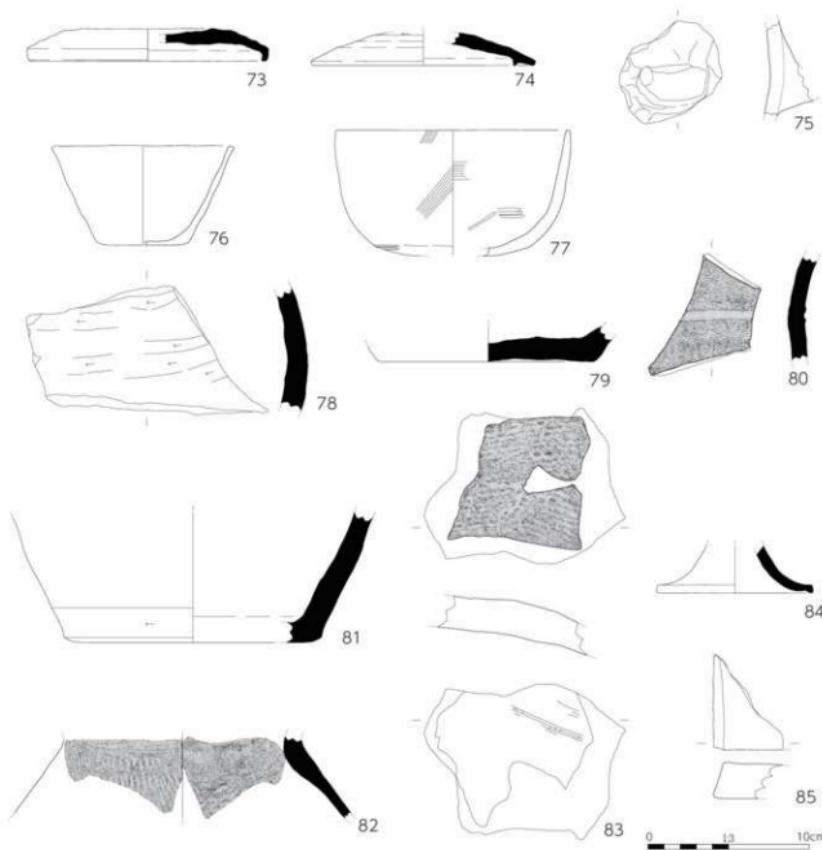
も井寺遺跡の一部が存在し、古墳造営に伴って丘陵頂部付近が破壊を伴う整地が行われ、古墳が造営されてあまり時間をおかずして丘陵の部分的な破壊が始まったと推測される。その後も継続して墳丘形状の変化は行われてきたと考えられるが、最も大きな変化をもたらすものとなったものは発見の経緯ともなった江戸時代末期における



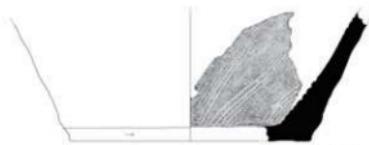
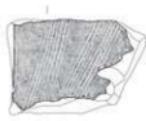
第31図 トレンチ内出土遺物実測図（古墳時代）

第4表 トレンチ内出土遺物観察表（弥生時代-2）

発掘月日	トレンチ	遺物	区分	時期	器種	部位	口径 (cm)	直達 (cm)	高さ (cm)	混和材	色調(外)	色調(内)	調整(外)	調整(内)	現成	備考
60 9 31 10	上部断面	古墳 前期	古墳	古墳	灰陶	口縁～瓶底	(9.0)	—	10.2	灰土、黄土	12.35・黒褐	ナゲ、ハケ目	ナゲ、ハケ目	ナゲ、ハケ目	良好	外部表面に斑状あらわ
61 10 -	42 上部断面	古墳 前期	古墳	古墳	灰陶	口縁～瓶底	20.8	—	(3.0)	内閃石、黄土	12.05・黒褐	ナゲ、ハケ目	ナゲ、ハケ目	ナゲ、ハケ目	良好	外部表面に斑状あらわ
62 10 14 調定	40 上部断面	古墳 前期	古墳	古墳	灰陶	口縁～瓶底	(22.0)	—	(3.0)	白土、角閃石	12.05・黒褐	ナゲ、ハケ目	ナゲ、ハケ目	ナゲ、ハケ目	良好	外部表面に斑状あらわ
63 6 -	—	上部断面	古墳 前期	古墳	灰陶	口縁～瓶底	(18.0)	—	(3.0)	白土、角閃石	12.05・黒褐	ナゲ、ハケ目	ナゲ、ハケ目	ナゲ、ハケ目	良好	外部表面に斑状あらわ
64 2 -	—	上部断面	古墳 前期	古墳	灰陶	口縁～瓶底	(19.0)	—	(3.0)	白土、角閃石	12.05・黒褐	ナゲ、ハケ目	ナゲ、ハケ目	ナゲ、ハケ目	良好	外部表面に斑状あらわ
65 6 -	—	上部断面	古墳 前期	古墳	灰陶	口縁～瓶底	(21.0)	—	(4.0)	白土、角閃石、黄土	12.05・黒褐	ナゲ、ハケ目	ナゲ、ハケ目	ナゲ、ハケ目	良好	外部表面に斑状あらわ
66 3 -	1 上部断面	古墳 前期	古墳	古墳	灰陶	口縁	—	—	(3.0)	灰土、黄土	12.05・黒褐	ナゲ、ハケ目	ナゲ、ハケ目	ナゲ、ハケ目	良好	外部表面に斑状あらわ
67 9 30	上部断面	古墳 前期 高岸	古墳	古墳	灰陶	口縁～瓶底	—	(12.0)	(8.0)	白土、角閃石、黄土	12.05・黒褐	ナゲ、ハケ目	ナゲ、ハケ目	ナゲ、ハケ目	良好	外部表面に斑状あらわ
68 11 -	1 上部断面	古墳 前期 高岸	古墳	古墳	灰陶	口縁	—	—	(2.0)	白土、角閃石	12.05・黒褐	ナゲ、ハケ目	ナゲ、ハケ目	ナゲ、ハケ目	良好	外部表面に斑状あらわ
69 14 -	42 上部断面	古墳 前期 高岸	古墳	古墳	灰陶	口縁	—	—	(2.0)	白土、角閃石	12.05・黒褐	ナゲ、ハケ目	ナゲ、ハケ目	ナゲ、ハケ目	良好	外部表面に斑状あらわ
70 14 -	—	上部断面	古墳 前期 高岸	古墳	灰陶	口縁～瓶底	—	(13.0)	(8.0)	白土、角閃石	12.05・黒褐	ナゲ、ハケ目	ナゲ、ハケ目	ナゲ、ハケ目	良好	外部表面に斑状あらわ
71 14 -	2 上部断面	古墳 前期 高岸	古墳	古墳	灰陶	口縁～瓶底	—	—	(8.0)	白土、角閃石	12.05・黒褐	ナゲ、ハケ目	ナゲ、ハケ目	ナゲ、ハケ目	良好	外部表面に斑状あらわ
72 11 30 12	上部断面	古墳 前期	古墳	古墳	灰陶	口縁～瓶底	(10.0)	—	(5.0)	白土、赤色陶化粒	12.05・黒褐	ナゲ、ハケ目	ナゲ、ハケ目	ナゲ、ハケ目	良好	外部表面に斑状あらわ



第32図 トレンチ内出土遺物実測図（古代）



89



90



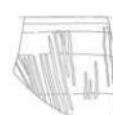
92



93



94



95



96



97



第33図 トレンチ内出土遺物実測図（中世）

土取によるものであろう。表土付近の擾乱土中から見いだされるこれら遺物がその地形変を物語っていると考える。

また、遺物の中心時期から見いだされる井寺遺跡の存続時期として、弥生時代中期～古墳時代前期にそのピークが認められる点は下六嘉遺跡群及び上官塚などの北甘木丘陵低位部分で認められる状況とほぼ符合する。ただ重弧文土器や長胴甕など弥生後期のものがある程度含まれることは下六嘉遺跡群における状況とは異なっており、矢形川を挟んで東西での集落構造及び弥生時代後期後半においての集落中心域のあり方を示唆するものであると考える。

惜しむらくは墳丘周辺に残されたかもしれない造営当時の遺物が周辺の夥しい削平により失われたこと、石室内部に残された副葬品についてもそのほとんどを失うなど井寺古墳の造営時期を特定するための根拠を遺物の面から見いだせない点にある。

第5表 トレンチ内出土遺物観察表（古代）

編 番 号 トレン チ 番 号	遺 物 種 類	取 出 上 下 限 年 代	区分	時 期	器 種	部 位	口 径 (cm)	底 径 (cm)	高 さ (cm)	底材	色調(外)	色調(内)	調査(外)	調査(内)	施成	備考
23 9 -	3 磁器類	古代		神-古	縦縫-天井部	-	(14.0)	2.8	筒形、直筒	淡黄	淡黄	回転ナメ	回転ナメ	良好	外側上面に擦出痕	
24 13 -	5 磁器類	古代		神-古	縦縫-天井部	-	(13.0)	2.0	直筒、内凹口	淡黄	淡黄	回転ナメ	回転ナメ	良好		
25 3 -	1 上加陶	古代		縦	把手	-	-	0.21	直筒、直縫	淡黄	淡黄	回転ナメ	回転ナメ	ナダ		
26 2 -	2 上加陶	古代		縦	縦縫-天井部	(12.0)	0.6	4.1	直筒、内凹口	淡黄	淡黄	ナダ	ナダ	良好		
27 0 -	1 上加陶	古代		縦	縦縫-底部	(14.0)	-	0.7	直筒、直縫	淡黄	淡黄	ナダ	ナダ	良好	外側表面に擦出痕	
28 3 -	5 磁器類	古代		縦	縦縫	-	-	0.20	直筒、内凹口	淡黄	淡黄	ナダ	ナダ	良好		
29 14 -	2 上加陶	古代		縦	直縫	-	-	0.21	直筒、内凹口	淡黄	淡黄	ナダ	ナダ	良好		
30 0 -	5 磁器類	古代		縦	縦縫	-	-	0.21	直筒、内凹口	淡黄	淡黄	ナダ	ナダ	良好		
31 14 -	2 磁器類	古代		縦	縦縫-底部	(13.0)	0.6	4.1	直筒、内凹口	淡黄	淡黄	ナダ	ナダ	良好		
32 遺道	4 磁器類	古代		縦	縦縫-側面	-	-	0.11	直筒、内凹口	淡黄	淡黄	ナダ	ナダ	良好		
33 5 -	3 磁器類	古代		神	縦縫-側面	-	-	0.10	直筒、内凹口	淡黄	淡黄	ナダ	ナダ	良好		

第6表 トレンチ内出土遺物観察表（中世）

編 番 号 トレン チ 番 号	遺 物 種 類	取 出 上 下 限 年 代	区分	時 期	器 種	部 位	厚さ (mm)	底 径 (cm)	底 材	底材	色調(外)	色調(内)	調査(外)	調査(内)	施成	備考
34 6 -	3 瓦質土器	中世		瓦	瓦	-	0.30	直筒、内凹口	淡黄	淡黄	回転ナメ	回転ナメ	ナダ	ナダ	良好	
35 7 -	1 瓦質土器	中世		瓦	瓦	-	0.30	直筒、单色磨光	淡黄	淡黄	回転ナメ	回転ナメ	ナダ	ナダ	良好	表面に擦出痕

編 番 号 トレン チ 番 号	遺 物 種 類	取 出 上 下 限 年 代	区分	時 期	器 種	部 位	厚 さ	底 径 (cm)	底 材	底材	色調(外)	色調(内)	調査(外)	調査(内)	施成	備考
36 3 -	- 1 瓦質土器	中世	-	瓦	瓦	-	-	0.7	直筒、内凹口	淡黄	淡黄	回転ナメ	回転ナメ	ナダ	良好	瓦質土器
37 3 -	- 1 瓦質土器	中世	-	瓦	瓦	-	-	0.40	直筒、内凹口	淡黄	淡黄	回転ナメ	回転ナメ	ナダ	良好	瓦質土器
38 4 -	1 瓦質土器	中世	-	瓦	瓦	縦縫-底部	-	0.21	直筒、内凹口	淡黄	淡黄	回転ナメ	回転ナメ	ナダ	良好	瓦質土器
39 16 -	1 瓦質土器	中世	-	瓦	瓦	縦縫-底部	-	0.40	直筒、内凹口	淡黄	淡黄	回転ナメ	回転ナメ	ナダ	良好	瓦質土器
40 16 -	1 瓦質土器	中世	-	瓦	瓦	縦縫-底部	(27.2)	-	直筒、内凹口	淡黄	淡黄	回転ナメ	回転ナメ	ナダ	良好	瓦質土器
41 14 -	1 瓦質土器	中世	-	瓦	瓦	縦縫-底部	-	0.60	直筒、内凹口	淡黄	淡黄	回転ナメ	回転ナメ	ナダ	良好	瓦質土器
42 16 -	1 瓦質土器	中世	-	瓦	瓦	縦縫-底部	-	0.60	直筒、内凹口	淡黄	淡黄	回転ナメ	回転ナメ	ナダ	良好	瓦質土器
43 14 -	1 瓦質土器	中世	-	瓦	瓦	縦縫-底部	(26.0)	-	直筒、内凹口	淡黄	淡黄	回転ナメ	回転ナメ	ナダ	良好	瓦質土器
44 14 -	1 瓦質土器	中世	-	瓦	瓦	縦縫-底部	(25.8)	-	直筒、内凹口	淡黄	淡黄	回転ナメ	回転ナメ	ナダ	良好	瓦質土器
45 8 -	- 1 瓦質土器	中世	-	瓦	瓦	縦縫-底部	-	0.30	直筒、内凹口	淡黄	淡黄	回転ナメ	回転ナメ	ナダ	良好	瓦質土器

編 番 号 トレン チ 番 号	遺 物 種 類	取 出 上 下 限 年 代	区分	時 期	種 別	器 種	部 位	口 径 (cm)	底 径 (cm)	底 材	始士(色調)	無色(色調)	調査(外)	調査(内)	施成	備考
46 7 -	青磁	中世	青磁	瓶	解剖	縦縫-底部	-	(3.4)	(2.7)	ROG-C211 黒の灰	ROG-C244 シルバーホワイト	織目文	ヘラス文	良好	瓦質解剖	
47 7 -	青磁	中世	青磁	瓶	解剖	-	-	(2.2)	ROG-C141 白茶	ROG-C143 銀灰色	-	織目文	良好	瓦質解剖		
48 11 32	中世	青磁	瓶	縦縫-解剖	-	-	-	(0.4)	ROG-C143 銀灰色	ROG-C232 銀灰色	ヘラス文	タシ織文	良好			

第4節 井寺古墳発見当時の様子を記した古文書の発見について

1 発見までの経緯

平成28年熊本地震での古文書等資料を救出する文化財レスキュー事業を追ったテレビ番組を見ていた旧蔵者がかつて古物商から買い上げて自宅に保存していた古文書を文化財レスキューを担当していた熊本被災史料レスキューネットワークの事務局長である三澤純熊本大学准教授のもとへ寄贈された。その後、目録を作成するために調査をしていたところ、いくつかの紙片に井寺古墳の記述が見られた。

三澤准教授はこのことを当町の史跡保存整備検討委員である甲元真之熊本大学名誉教授へ伝え、甲元名誉教授から知らせを受けた小職が熊本大学に赴いて内容を確認し、平成29年12月に熊本大学文学部において連名で記者発表を行ったものである。

2 古文書に記されていたもの

寄贈された古文書は書簡を含まず書状のみで、井寺村庄屋であった有馬次郎助宛ての文化7(1810)年～明治3(1870)年にかけての公用書状1649点の中に含まれていた。

全体の史料のうち、井寺古墳に関するものは3点が含まれていた。

①古墳発見の様子と出土品の報告書草稿

②古墳の外観及び内部構造についての報告書草稿

③出土品の返却とその後の取扱について、

藩奉行手からの指示書(写し)

これらは古墳発見の状況を上位組織である鰐淵庄屋に報告するための草稿と、その後惣兵衛から藩の上層部まで報告が上がっていった結果、奉行からの指示を控えとして写したもので、清書したものや本状ではない。ただし、清書には現れない草稿に書かれた情報の生々しさは、発見時の状況についていくつもの示唆を与えてくれるものであった。

3 有馬家文書が示すもの

(1) 既に失われた事実の記載

濱田耕作が率いる京都大学が井寺古墳を調査したのが大正5(1916)年、そのときには既

に石室内は荒らされており、構造を知ることが出来なかつたと書かれている(濱田・梅原1917)。当時のことを知る者からの聞き取りにより障壁によって3つの区に分かれる(コの字形屍床)こと、奥の区に石棚を設けてあったことが模式図とともに報告されていたが各区画の寸法等は不明であった。また、副葬品については直刀と鏡があったと聞き取りであるものの鏡は失われている。

有馬家文書の発見により①により副葬品は「鉄鎌・槍身・刀・鏡」であったこと、②により石室内の各施設における寸法が事細かに計測されていること、発見の経緯として崖(法面)が崩れたのは事実であるが、原因として畑の肥としての土取であり、地震とは関係ないことが明らかとなった。

(2) 従来説の否定

今回、本報告書でこの発見について扱った理由としては古墳発見の経緯がこれまで言われていたように安政4(1857)年に地震が起きた結果法面が崩れて石室の入口が姿を現したわけではなく、墳丘の土取りの進行によるものであった。

いつの時点でのこの事実が間違って伝わったのか、大正3年の『六嘉村誌』、大正5年の『京都帝國大學文學部考古學研究報告』、大正10年の『上益城郡誌』にも地震で発見されたと記載されている。以降のこれらの文献を出典としており、井寺古墳の解説板にもこのことが記されている。

今回の発見及び出典の原点に遡る調査を実施したことによりこれらの事実記載が否定された。このことについては古文書の詳細及び地震後の石室被害調査についてなどを含めて別稿を設けることとし、墳丘形態の変状に関係する土取が江戸時代末期に行われていたことを紹介するに留めておく。

【引用・参考文献】

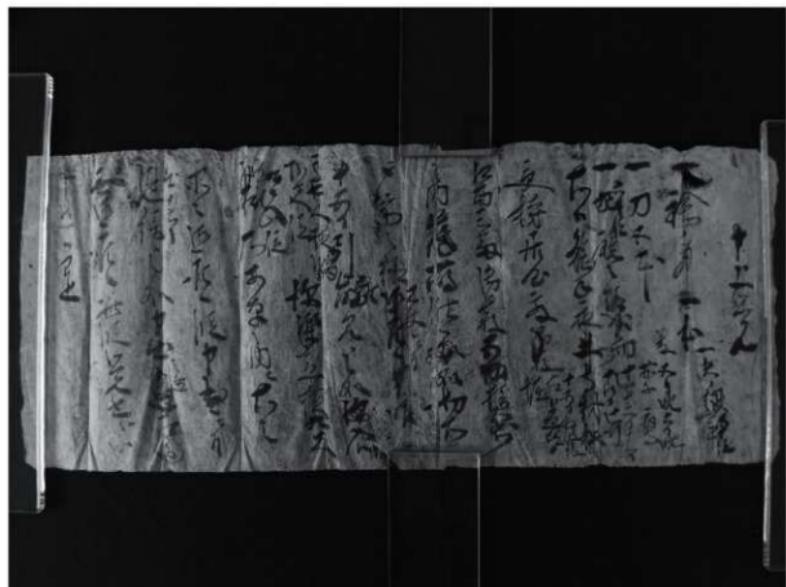
六嘉村編 1914『六嘉村誌』六嘉村

熊本県上益城郡編 1921『上益城郡誌』熊本県上益城郡

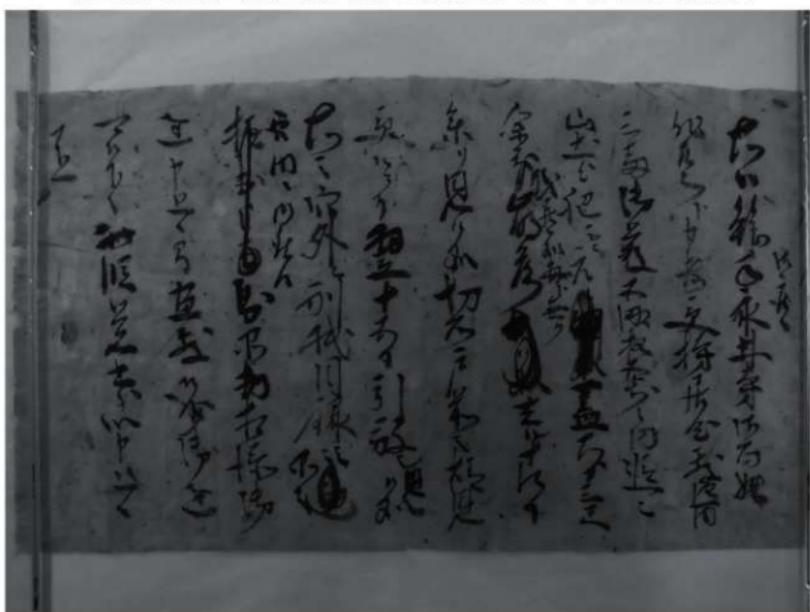
三澤純 2019『新出有馬家文書の概要と井寺古墳関係資料発見の意味』熊本県立歴史博物館

濱田耕作・梅原末治 1917『肥後に於ける鉄鎌ある古墳及横穴』『京都帝國大學

文學部考古學研究報告』1 龍川書店



「申上覚」副葬品の種類と員数、発見の状況を報告する際の草稿（三澤准教授提供）



「申上覚」発見に至るまでの経緯、土取によりことが記載（三澤准教授提供）

総括

第1節 井寺古墳墳丘の調査について

1 問題点の調査結果について

第1章で掲げた問題点を今回の調査でどの程度把握できるようになったかについて、以下に列挙する。

(1) 周溝

田添氏が調査した箇所に加え、墳丘が大きかった場合などいろいろな想定の下、残存墳丘を含めて計16箇所にトレンチを設定し調査を行ってきたが、周溝は確認されなかった。

墳丘周辺の地形が著しく変更されているため一概に存在しないと言い切れるものではないが、丘陵頂部に造営された古墳であるために地形を切り出す方法も採りうる。

ただし、地溝帶を挟んで南側の北甘木丘陵における古墳のはほとんどは周溝を有するもの（装飾古墳を含む）であるため、周溝が存在する可能性を捨てきれないでいる。

(2) 葦石

葦石が存在するという話もあり、確かに墳丘上に転石が多く見られるため石の材質などからその可能性は低いと感じながらも墳丘形状及び規模を特定できる根拠として確認されることを期待していたのだが、調査した箇所において葦石を確認することは出来なかった。

確かにトレンチ内から様々な形状の礫・石を確認することはあったが多くは多孔質の溶岩様のものであり、おおよそ葦石に用いられるような表面の滑らかな材質のものではなかった。

ただし、墳丘上にこれら礫が墳丘盛土に混じって存在することの意義については今後考えていく必要があるが、これら礫の出土層位が表土付近および黒色土帯下位の砂礫層には限定されることから、墳丘上に二次的にもたらされたもの（墳丘盛土復元のため別所から土を持つ

てきたなど）であることを考慮せねばならないだろう。これを検証するには現在地震で亀裂の生じている石室周辺部を調査する必要があるが、石室が崩れそうになっている今は手を付けることが出来ない。

(3) 墳丘形状

残存墳丘の状況から円墳説・前方後円墳説が挙げられていたが、調査の結果として墳丘形状を確実に決める根拠を見いだすことは出来なかつたものの、前方後円墳のくびれ部とされた部分は後世の削平の結果そのように見えるものであることが確定され、前方後円墳説は否定された。このことから從来から言われているように円墳である可能性が最も高いと考える。

(4) 墳丘規模

形状とともに規模を定義づける根拠に欠ける。原因としては墳丘周辺が相当程度削られた結果古墳に関係する土層を悉く欠いていること、また一部残されている部分についても竹林化に伴う竹根の土壤攪乱により表面近くにある痕跡を喪失させている点にある。

また、残存墳丘についても地表を見ると一見残されていそうな印象を受ける北側斜面においても30~50cm程度の削平を受けており、位置的に文部省が設置した史跡境界標より北側については相当程度削られている。

2 小結

これまでにまとめてきたように侵襲的なトレンチ調査を実施したにも関わらず問題点を解消する決定的な根拠を見いだすことが出来なかつたのは非常に残念である。

一方で墳丘自体を触ることにより井寺古墳の墳丘盛土がどのようなものであるか把握できたこと、当古墳造営のあり方の一端を知り得たことは評価したい。

第2節 墳丘規模の推定

1 残存墳丘の土層堆積状況

残存墳丘の土層が認められたのは 14 トレンチ、15 トレンチ、17 トレンチに限られる。

黒色土帯の上に暗褐色・黒褐色土及び黄褐色土を交互に重ねていき、それぞれを固くしめながら墳丘を構築する工法を探っていることがわかる。ただし、これらの土が火山灰土由来であるのに加えて砂質がやや強いためか粘土系に比べてしまいの程度は弱い。今回調査した場所が単に石室に隣接していない二次墳丘の端付近であるため、こうした状況にあるのかもしれないが、やや大ざっぱな印象を受ける。熊本県において石室近辺の墳丘盛土大きくを裁ち割った例があまりなく、地域性なのか単にこの古墳に限ったことなのかは不明である。

2 黒色土帯の評価について

(1) 黒色土帯について

墳丘構築土の下層に横たわる黒色土帯とはなんであろうか。この土層が火山灰由来の土壤で見られる黒ボク土と様相が異なる点、他の火山灰性土壤との兼ね合いから自然層位ではないと考えられることについては前章で述べたとおりである。

また、各トレンチにおいて黒色土帯がほぼ水平に堆積している状況は前章で述べたとおりであるが、墳丘全体から見た場合について、次で考えていくこととする。

(2) 墳丘全体から見た黒色土帯の堆積状況

墳丘全体からの視点から黒色土帯を見るために個別のトレンチ断面図だと図面の性質上断面軸に沿った 2 次元的な見方になるため、全体地形の中での見方をするために 3 次元的に組み合わされた複数の断面と墳丘を任意視点から望み、相関を見ていくという方法を探った。

土層断面図を 3 次元的に表示するのは中々面倒な処理を踏まねばならないので、今回はドローンによる写真から作成した地形測量図にレーザー計測による石室 3 次元モデルを合成し、一体的な墳丘と石室のモデルをベースとしてトレンチ調査中に作成した土層断面の 3 次元モデルをこれに追加したものを Cloudcompare

で表示させ、石室の渓門を正面とした方向に回転させてこれを 0° とした場合の時計回りに 45° (北北西)、 135° (北北東) から見たものをそれぞれ出しし、線画に起こした。

黒色土帯はトレンチの土層断面からほぼ水平であるという点についてはこれまでの調査結果で述べたとおりであるが、墳丘全体という視点から見てみると第 34 図のとおりとなる。

黒色土帯を確認できたのは墳丘の北側及び東側に限られるわけであるが、少なくとも石室の東西軸を境に北側については黒色土帯が良好に残っているものと推測される。ここで注意しておきたいのが、残存墳丘付近では標高 222 m 付近でほぼ水平であり、墳丘から離れていくにつれて周辺地形の傾斜に合わせてなだらかに傾斜していく傾向が 14 トレンチで見られる点である。

残念なことに黒色土帯が石室中央から約 30 m の範囲で残存している部分が 14 トレンチに限られていること、14 トレンチにおいても水平から傾斜へ移行する境界については擾乱などにより把握できないため、墳丘周辺において同様の傾向が見られるか知ることは出来なかったが、墳丘が構築された部分は水平に近く、縁辺部については原地形の傾斜に沿って整地された可能性があると思われる。

(3) 黒色土帯の評価について

上記の点をまとめると、黒色土帯は石室の中央から約 30 m までは確認できることから墳丘外においても確認されるものである。ただし、14 トレンチでもそれより先、また 13 トレンチでは確認できないことから約 40 m 付近では見られない可能性がある。墳丘が残存する部分ではほぼ水平であるが、ある程度距離が離れるとき形に沿って傾斜する傾向にある。

こうしたことから黒色土帯が水平に堆積する範囲が古墳の墳丘が存在する可能性が高いと判断できそうである。ただし、黒色土帯の分布が広範囲で追える 14 トレンチでも溝などの遺構や擾乱が入って確認できないため、どの範囲まで黒色土帯が水平に堆積するのか結局の所不明である。

3 墳丘盛土の傾斜具合から見る墳裾の広がり

墳丘形状を特定できる周溝や葺石などの構造物を確認することができない上に周辺の悉くを削平されている当古墳において、墳裾を捉えることは叶わなかった。こうしたものから導き出せる墳丘規模については根拠を欠くこととはなったが、辛うじて一部で確認できた墳丘盛土の状況から推定される墳丘規模について考えてみたい。

検証可能なものは14トレンチにおける墳丘盛土の堆積状況である。上部は削平されており、連続的に傾斜を見いだすことはできないが、層の延長を復元して整地面である黒色土帯との辺りで接地するかを検討したものが第34図である。黒色土帯に近い部分の土層はやや湾曲が強く、表層に近づくにつれてその湾曲が緩やかになる傾向が見られ、その弧が接地する部分は石室中央から12~14mの範囲に収まりそうである。黒色土帯は13mのところで確認できた先は18m付近まで確認できず、18mでは水平面から1m近く下がるため前項で述べた前提に立つならば墳丘は18mよりも大きくなるないと考える。

この想定を東西軸に当てはめてみた場合が第35図の下にある。17トレンチは搅乱を除去して墳丘盛土と思われる部分で掘削を止めているので、この傾斜に合わせて弧線を描いた。

14トレンチで想定した12.2mでは残存墳丘よりも内側に入り込む。17トレンチでは黒色土帯と接地する部分は14.8mである。

以上に加えて墳頂からの斜面延長を考慮した場合、14トレンチで見られたように墳丘内側でも表面付近の墳丘盛土を失っている可能性を考慮し、あまり削られていない場合12.2m、相当程度失われていると考えた場合16m付近が妥当である。17トレンチでの想定を考慮すると15~16m付近が墳裾として自然な数字ではないかと考える。

第3節 総括

1 調査成果総括

今回の調査で得られた成果をまとめると以下のとおりとなる。

(1) 墳丘は造営後複数回にわたる削平により墳丘縁辺のほとんどを失っている。残存墳丘として考えられていた部分もある程度削平や竹根の影響を受けている。

(2) 墳丘盛土は火山灰性土壤由来であり、黒褐色土と黄褐色土を交互に用いる。粘土のものにくらべると層のしまりは弱い。石室付近の土は調査できていないため不明である。

(3) 墳丘構築土の下層に黒色土帯が確認され、石室からある程度の距離までは標高22.2m付近でほぼ水平に堆積する。それを超えると原地形に併せて傾斜する傾向が見られる。

(4) 黒色土帯の水平堆積面と墳丘盛土及び墳丘表土の傾斜延長の交点から推定される墳裾は石室の中心から15~16m辺りにあると考えられる。

以上の成果をもとに、これまで不明確であった井寺古墳の範囲を定義づけるとすれば、下記のとおりとなる。

(5) 墳丘の最小限範囲

少なくとも石室中央から15~16mであり18mは超えない見られ、これから導き出される墳丘規模は30~32mとする。

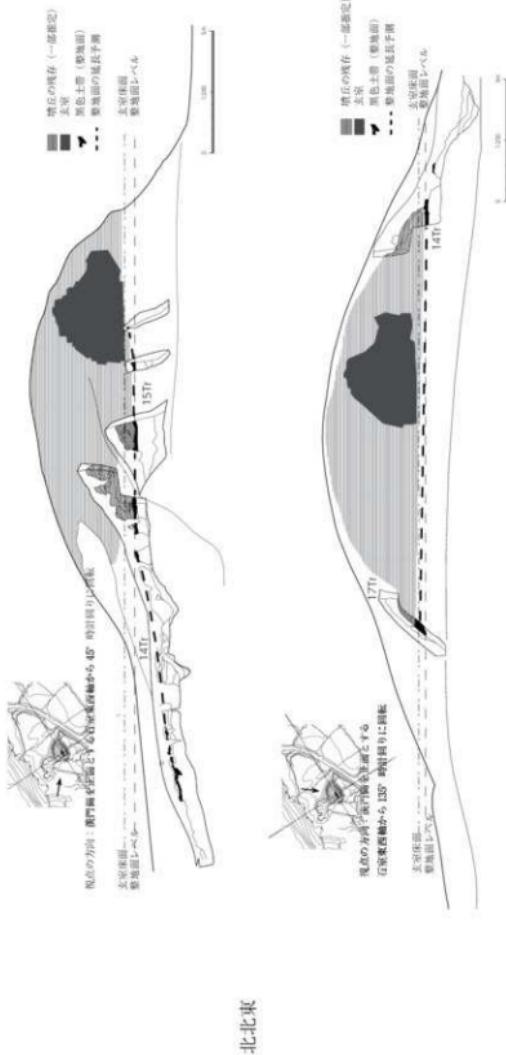
(6) 古墳の範囲

墳丘規模は上記のとおりであるが、黒色土帯が古墳造営に伴って形成されたものと考える場合、14トレンチの北端で確認された石室から30m付近をその範囲とする。

2 史跡範囲として今後保護すべき範囲

以上のことを踏まえて史跡範囲として今後保護すべき範囲は、第36図のとおりとなる。地震により被害を受けた石室及び墳丘の復旧についてはこれから取り組むべき課題ではあるが、今回の調査成果をもとに復旧と併せた整備を実施していくと考えている。あまりにも削平が大きいため根拠が弱い部分もあるが、今後の調査の進展により修正されることを期待して結びとしたい。

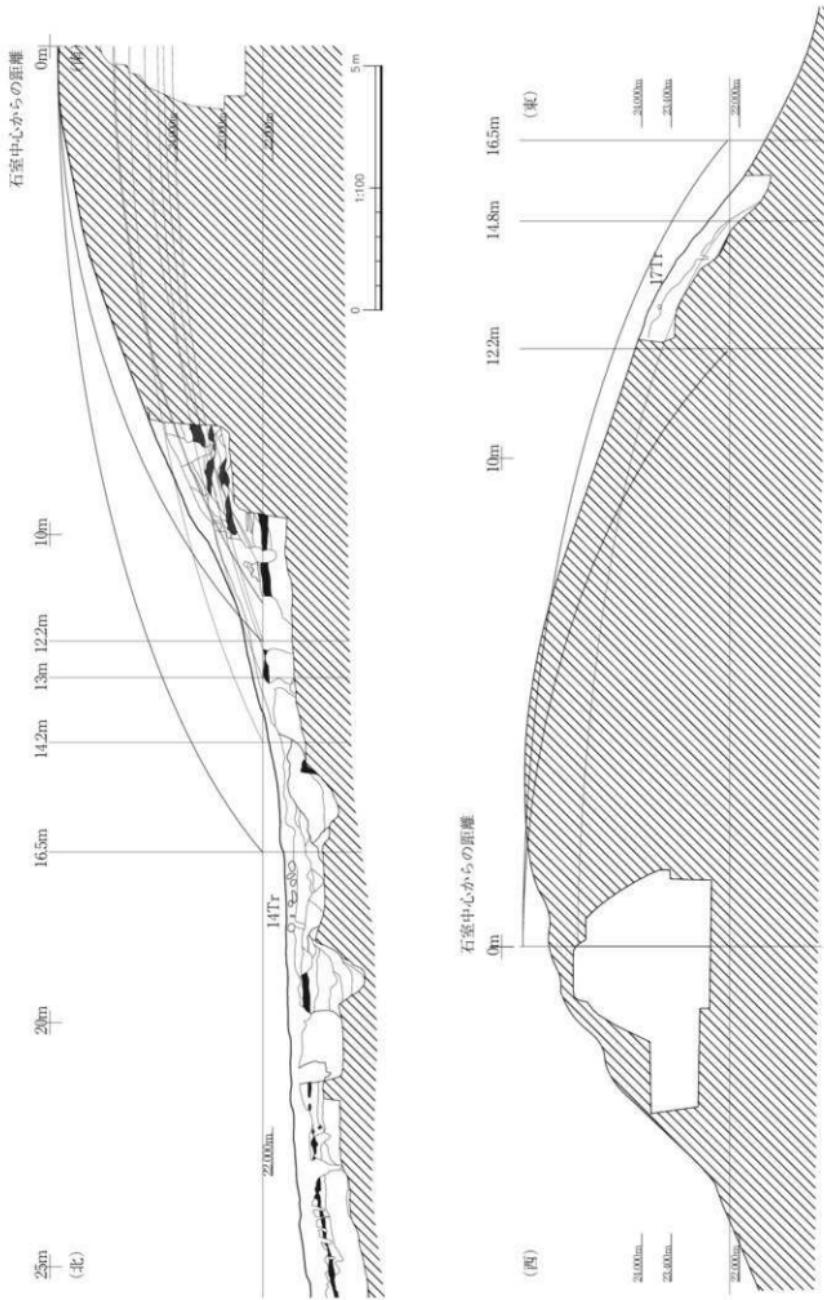
北北西



ドローンによる地形測量図とレーザー計測による石室3次元モデルを合成したものに写真計測によるトレンチ土壁断面を追加し、石室の奥門を正面に据えるように回転させ、任意の角度(45°、135°)から見たものを出力し、トレースした。

第34図 黒色土帶の丘がりと窓及び壇丘の残存状況

第35図 増丘構造土の傾斜から見る埴泥の推定



第36図 史跡の現況範囲と今後保護が必要と考えられる範囲

